

いなア、しかしお前さん方はおまいりかな、甲「へエ實はお寺へ參詣をいたしまして、今から大瀧におどりがございます、それを見に行かうとぞんじて居ります

一「ウム、そうく、何か將軍家の仰せで、百姓町人どもが、おどりをすると云ふことぢやナ、乙「ハイ、さやうで、マアく少々暑くつても將軍さまの仰せでございまから、みなをどりに出ます、わらい景氣ですよ、一「ウム、これは面白からう、わしも行つて見やう、皆「へエ、禪師さまもお出でになりますか、一「ウム、しかしちよつと待つて下され」と一まにはいつて一休は何か見仕度をしてゐられたが、これよりみなく一同さうち連れだち、大瀧へ出てきて見るとその邊一体は燈籠を點し連ね、おどりの場は何百何十といふ澤山の紅提灯でさながら晝のまごく、彼方正面には棧敷を拵へて、足利四代將軍義持公、彼のおどりを見て楽しんでゐられる、そのまわりには役人連中、皆十手半棒などを持つて

敵重に警固をいたしてをります、禪師を始め一同の者はジツとこなたを眺めるに何百人といふおどりが歌に合して手ぶり足拍手おかしく、グルリ輪になつてをきつてゐるが、櫓の上には鐘や太鼓を囃立て、ドンチャンく賑かなことでもございます、スルと彼の一休は、しばらくの間ジツと見てゐられたが、何おもつたか着てゐる着物をクルくツと脱き捨てると、コワそもいかに、下には野晒の浴衣を着て紅木綿の三尺帯を締同じ紅木綿の手拭をもつて、僧侶頭に頬冠りそのまゝにバラくくと駈出して、をどりの中へ飛びこみからおなじく手ぶり足拍子を取つてドンくくをきり出した、檀家の人々はただ皆「アーツ」と呆れてゐる。

その機會音頭どりはそれと見るより、バツタリ音頭をやめてしまつた、このとき、禪師は一調子張り上げ、をきりながらに割竹のやうな聲を出して、節面白く

歌を歌ひ出した。「竹の割節の溜り水、清ます濁らす出ず入らず、世は源之助の袖の露、片々寄らず片寄らず、踰跟つくまいぞ二合半の、酒は辛氣辛苦に良い薬、それも過ぎせば鬼となる、餅のちぎりは取り粉が仲人、なにをくよくよ川端柳水の流れを歎くぞ水刀、淺く契つて末まで遂げよ、紅葉の色の薄いが散るか、濃い先づ散る習慣なり、人の如りにも云ふ鳥も、人の云ふこと聞く獸も常の人にはまだならぬ、人が一だと思ふてゐると、悪るふ倒けると六になる、音羽の瀧の白糸も、夜晝なしに流れ合ひ、細ふ長いがたのみぢや歌へや飲めや春の影花を愛すりや身が立たぬ、釋迦のお師のやすだら女も、美しいのを捨て、ゐたうつくしいとはいづれのことよ、皮が包んだ胃の袋、五夜も寝もせで迷ふ朝、腹が膨れて能く實が登つた、をぎれや／＼をぎれやいヤート、ヤアヨイ……」と高聲に歌ひながらをぎり狂ふてゐる。

これを眺めて將軍義持公は「ヤフ不届き至極の奴ツ、それ召捕れツ」といふお指圖に、役人どもは「ハッ」と答へて、バラ／＼とツと一休の傍に駈つけきたり。役「コリヤ、神妙にしろ、用御だツ」と大喝叫んでをり縋らうとする、そんなことには耳にもいれず「竹の切節の溜り水……ヤートヤア、ヨイ／＼イヤ、役「コリヤ／＼ツ神妙にしろツ」と忽ちの間に五六人の役人が、一休をどつて押へ、はやくも繩を掛けてハツとほ、冠りをどつて見ると這はそもいかに、大徳寺の一休禪師でございますから、ハツと驚いた役人ども、どうしやうかと思つたが、顔を知つて召捕らずに、見逃すことも出來ず、また繩を掛けてからこれを解く譯にも行かず、さつそく繩尻ををりて將軍家へ言上に及ぶ、將軍家も一休と聞いて大いに驚き、早速繩を解かせてお手許に召され。

將「コリヤ、禪師何等のためにをぎりの妨害をいたされしぞ」と云はれて一休は

まつとなり、「イヤ決して妨害はいたしません、彼れも喜びまたわれも喜びはば彼我同樂、ごもに楽しんで居りましたので、義「ウム、シテ今の音頭はかなる譯ヂヤ」ご尋ねられた時に「一休ごのは「貴方は天下を預る將軍家のおんみを以て些細な下民ごもにををりをまをし付け、こんなものも御覽なさらずども他に御覽になることは澤山にあります、腹がふくれて能う實が乗つたををりやををれと申しましたは、豊年ごなり豊作ごなれば、自然農民ごもの仕合せとあるなるでございませう、それを上に立つ人が、ただ吾が目を慰め、耳を喜ばしむるため下さまの者にかゝるを申し付けられると言ふは、甚だよろしく有るまいと考へます、ごうかこの、ちは是非かやうの義、お止り下されたく願ひ上げます」

と申し上げると、將軍家は「ウム」としばらく考へて居りましたが、やが

てのことに、義「ア、誤てり、まことに予が悪かつた、許してくれ、今日限りとしてこのををりは中止をいたすであらう」と仰せられ、厚く禪師にお断りを申し上げて、そのまゝその日は御歸還になつたのでござますが、その、ちは絶へてこのことがなく、京都の民百姓も大きに打ちよろこんだこととございませう。

二四 獨 饑 の 年 始

然るにその年も明けて、應永二十年正月になると、京都の町はいづれも門松七五三飾り、和氣陽々として殊の外賑ひます、これは神道でも佛道でも、正月の飾りだけはいたします、全體この七三五と言ふのは、天神七代地神五代、所謂天人三歳をかたごつたものだご云ひ、ごごでも三ケ日の間は雑煮を祝ひ、

屠蘇酒を出すなぞ、芽出度いものでもち切つて居ります。

スルとこの日は朝から一休禪師、竹の先きに鬻體を付けて、芽出度いくといつて京都の町中をあるいた、丁度かねて心易くする錢屋久平は、四條室町上る處に家があつて、當時京都第一の書籍店でありました、一休はこの錢屋の門口へお出でになつて、「ハイ今日は……久平は居るかナ」とズイツとはつて來る、ところがこのとき主人の久平は、元朝のこと、朝の膳につき、續いて女房から番頭、丁稚みな揃つて屠蘇を祝ひ、これから雑煮をたべやうとするときに、ズーツと一休禪師がはいつて來られた、俗に僧侶丸儲けとは申しますが、元日の朝から一休が鬻體を持つて來たので、流石に久平は佛道を學んで居るから、左のみ驚きはいたしません、他の番頭、丁稚などはいやなものを持つて來たと言ひあはしたやうに眉を擡めて居る、そこで主人の久平は、久「イヤこれは禪

師さま入らつしやいまし、まことに靜かな春でお目出度うぞんじます、サアどうぞこちらへ……」
「ウムマア上らして貰をうか」と案内に連れて座敷へ通つてくる。

久「エ、今日は御悠然りとお話しを願ひます、なにもございませませんが、マア一杯献じます、」
「ウムそうか、それはどうも辱ないナ、では早速に御馳走にならうか、久「ハイ、どうか……ア、コレ、御膳をこへ持つて參れ、女「ハイ」どやがて、そこへ運んで來た膳の上を、一休はジロリと御覽になると膳には裏白を敷いて、鯛の鹽物、俗に白目鯛と云ふのを乗せて飾つてある、この鯛は正月の二十日の日に焼いて喰ふのでございます、」
「イヤどうも大變いろくな物がならんで居るナ、なんだいそりア……、久「ハイこれでございませるか、これは山草、俗に裏白と申しまして、齒朶でございませす、」
「何に、死んだ……、久「ご

ぜうだんおつしやつチア困ります、山草で……、「ハ、ア病草か、久「病草
 チアありません、齒朶でございませよ俗に裏白と申しましてね、「ハ、ア裏白
 か、白と云ふものは全體清いもので棺桶は白布で巻くな、久「ごうも困ります、
 さやうなことは抜きにしてお難煮はいかがでございます、久「ウム難煮、これは
 結構だ、さつそく頂戴ませう」と今禪師が箸をお取りにならうとする、久「
 エ、禪師、これは大箸と申しまして、身上が太くなるやうにと、延喜を祝つてま
 ことに目出度い箸で、「ウム久「サアごうかおあがり下さいまし、「ハ、ア、ス
 ルとなにかい、これは半が太くて、跡先きが細いやうだが、シテ見ると末には
 身上がだん／＼こまかくなるナ、久「またですか、ごぜうだんおつしやつチア行
 けません、サア汁がさめますからごうぞ召しあがつて……、「ウム御馳走にな
 らう……ウムなか／＼うまい、アツ久平齒が抜けたぞ」

久「へエー、夢に見てさへ悪いと申しまするに、元日そう／＼齒が抜けたなん
 てあまり宜いことぢやございませんな、「オヤ／＼そうぢやないぞ、この餅に
 四匁三分の銀玉がはいつて居たぞ、ソーラ見ろ、久「ハ、アなるほじ、これは
 お目出度うぞんじます、「イーヤ、何が目出たい、久「全體私方の家例とし
 て、年々に搗く餅の中へそのお金を入れて置いて、誰れか一人その餅に食ひ當つ
 た者は金持になるといふのでございませが、さては貴方さまに當りましたか、「
 「ウムそうか、久「スルと貴方は當年金持になりますよ、「ハ、ハ、ハ、馬鹿をい
 へ餅の中に金などを入れて置くのはいけない、以來はよしたがよいナ、久「へエ
 ーそれは何故で……、「わからんやツだナ、考へて見ろ、金の中から餅が出
 たのならそりア金持に成るかは知らんが、餅の中から金が出たのでは、この身代
 はもちかねるぞ。

久「へエー、どうもそう妙なことをおつしやつちや困ります。」「へ、、、しかし久平、其處にあるのアそりやなんだい、久「へエこれでございますか、これはその白目綱と申して二十日まではかうして飾つて置きます、」「ウム、スルトただ見るだけのことか、久「さやうで、それは先づ一方の頭になるやうと云ふ、つまり延喜を祝つたので、二十日まで置きますが、二十日になるとこれを焼いて家中で骨までたべます、」「ハ、アそうか、シテ見ると今のところはさらし者……獄門だナ、それが二十日になつて骨上げをするのか。

久「どうもたびく恐れ入りますな、今日だけはさやうなことは眞つ平に願ひたいので、私がかまひませんが、家内や店の者が變に思ひます、この通りで……、」「ハ、、、手を合せたな、それに珠数を掛けるに「度亡者」のやうだ、久「どうもあきれかへつて、貴方にもものはいへません、今日は他の日と

違ひ正月の元日で、さうかそればかりはおつしやいませんやう、」「ウムさうか、それほごお前が氣にするなら、祝ひ直して遣らう、紙と硯をもつて來い、久「へエありがたうぞんじます、さうか目出たいのを願ひます、」「よし、サア硯を出しなさい……前に酒を一杯注いでくれ、久「へイ畏まりました」と久平はお酌をするに「休禪師、グイツと一杯飲み干して、そこにもつてきた紙をとり上げ、サラ／＼と認められましたのは、

正月の儀式は死ぬる事始め

左儀長は火葬二十日骨上げ

門松は冥途の旅の一里塚

目出度くも有り目出度くも無し

「さうだ目出度からう、イヤわれながら能く出來た、ソレ之れだ、久「へエー

なるほご、
 「世の中に死ぬる程めでたいとはない、久平之れだく」
 といま、
 で懐中して居た鬮を、ヌツと久平の目の先きに突きつけたから、久平は驚ろ
 いだ、久「へエツ、之れはごうも、
 「ごうもヂアない、朝の紅顔夕の白骨だ
 こうなつたのが一番めでたいのだ」
 そこでこの歌は久平が貰ひ受け、久「ごうぞ
 ゆつくりお話しをなすつてお歸りを願ひます、
 「イヤまだ行くところがあるか
 ら何れ春永に來ることにしやう、ハ、さやうなら」
 とそのまゝ、表へ飛び出す、
 ところへ通り掛つたのが蜷川新左衛門でございます。

新「イヤこれは禪師には何れへお越しになります、
 「イヤお前も大層早くごこ
 へ出掛けたナ、
 新「ハイ今朝から一二軒年頭の禮に参りまして、今こゝへはいら
 うとするところで、
 「ア、そうか、わしも今日は元旦の禮に來た、何と新左衛
 門、これを見さつしやい、まことにめでたい年のはじめだ」
 と例の鬮を突き出

した、
 新「へエ、これはごうも恐れ入りました、
 「ごうだ新左、

肉氣なき此鬮 儼あなかしこ

美人と言ふも皮の事なり

面白からう、
 新「ハツ、
 「それではこゝで別れやう、
 新「ア、左様で………しか
 しごこかへお出になるのならば、お供いたしませうか、
 「イヤく、わしはモ
 ウこれから歸るのヂヤ、後からやつて來るが宜い、
 新「さやうなればこれでお別
 れまうします、
 「ウム」
 とそのまゝ、禪師は新左衛門と別れを告げ、ただ一人ブ
 ラく、と今丁度三條通りへ掛つて來る。

二五

蓮如問答

スルト向ふの方から行列美々しく本供で乗り込んで來たのは、
 それぞ本願寺

八代目の蓮如上人、當時有名なる博識の僧でございませう、それと見るより一休禪師心の中に、「ハ、ア、本願寺の蓮如上人だナ、未だ俺は蓮如の力を知らないが、こゝで會つたのを幸ひに、一つ試してみやう」と思召し、そのまゝ乗物の傍へツカ／＼と進み出で、「イヤ蓮如さん、私は一休だ、ちよつと待つて貰ひたいナ」と聲を掛けるゝ乗物の中より、蓮「ウム、しばらく待て」と聲を掛け、ピタリと乗物をとめて戸をひらき、靜かにそれへ立出でられた蓮如上人、對手が一休だから御自分の方から御挨拶がある、おなじく禪師も挨拶を返されて、

「時に蓮如さん、私はお前さんに少し聞きたいことがある、上「それはなん

でございませう」上人も往來中で問答を仕懸けられてはちつと迷惑だとは思つたが對手が禪師だから仕方がない。

上「なんの御用で……、」

「フム、他でもないが、

袈裟衣有り難どうに見ゆる共

是れも俗家の他力本願

どうだナ」これはお前さんの袈裟や衣は、皆立派にピカ／＼光つて居るが、これも他の力で出来たもので、全然他人のものを着て居るのだといふ、まことに悪口をおつしやつた、これを聞かれた上人、少しムツとしたが、とりあへず歌をもつてお答へをしられた。

物の名も處に仍つてかはるなり

浪花の葦も伊勢の濱萩

と答へられた、これは三界無安樹下石上を宿とする僧と違つて、上人は奥方をもつてお暮しになることに宗旨が違ふから仕方がない、それは丁度浪花の地で葦といつて居るものでも、伊勢へ行けば濱萩と名が變るやうなものだといふお答へ、

スルト再び一休は、「なるほご、しかし西方に極樂あり、又一百三十六地獄ありといふが、譯を知らないではお前さんも濟むまい、わしは行つたことがない、さうかそれを教へて貰ひたいものだ。」上「さうでござる、ありといふ、またなしといひます、これでは如何で

有りに言ふ人には地獄あるものぞ

無しと思へば人にこそ仍れ

一「ウム、なるほご、イヤその通りく、聞きしに勝つた當時の名僧、實に天晴な人ぢや、ときに眞の佛といふはどこにあるか、これも序に教へて貰ひたい、上「ハ、ウム……」といつたま、少しく答へが詰つた、このとき禪師はカラくとお笑になつて、「それはこうであらう、

金佛や木佛畫佛石佛

有り難がるも口利かぬ故

釋迦阿彌陀地藏藥師と名は有れど

心は同じ佛なりけり

なんと蓮如さん、まことの佛といふのはこれぢやく」と竹の先きにつけてあつた鬮腰をズイツと上人の前に突まだした、スルト上人は、上「如何様かうなればめでたき最上でござる、これぞ眞の極樂、ハ……」と、上人はこれを手にとつて二三を押し頂いた、「イヤさうも、天晴れ天下の名僧、恐れ入つた、まだ一ツ二ツ聞きたいことがあるが、今日はこれでお別れまをし、近日お尋ねをするであらう、イヤ大きにお妨げをいたしました」と、そのまゝお別れになつたのでございませう、これが縁となつて後に有名なる彼の禪師と蓮如問答と相成るのでございませう。

二六 馬圖の賛

友は類を以て集まるといふ喩の通り、禪師と交るほどのものは、皆何處やら世俗に超越して居るが、尤も相許したのは山科本願寺の蓮如上人であつた、或る時一休と蓮如が揃つて居る處へ一人の男がやつて来て、一幅の馬の圖を取り出しながら、男「さうぞお二人で賛をして頂きたう存じます」と願つた。一休は根が氣輕の性質だから一義にも及ばず、「ア、宜しく」と云ひながら、直様筆を取つて、「馬ぢやけな」と書きつけ、「サア御身も一つ書いてやりなさい」と上人の方へ廻した。

頼んだ男は呆氣に取られて見てゐると、上人にも直様筆を取つて「さうぢやけな」と書いたので、頼んだ男も見てゐるものも、アツと云つて面喰つた、處が

この一休には又一路居士といふ友達があつた、此のものは、泉州石津の上市村に庵を結んで居たが、之れが又なか／＼世を拗ねたものであつて、

身を隠す庵の軒の朽ちぬれば

生きても苔の下にこそ住め

と吟じて、思ひを世塵の外に潜めてゐた、之れを聞いた一休は面白い事と思つて或る日不意に其の庵を訪れた。

一路居士も一休が來たと聞いて大いに喜びながら、早速庵室へ案内した、一休は挨拶さへも碌にしないうちに

「萬法有道如何是一路」と問ひかけた、スルト一路居士は莞爾として「萬事可休如何是一休」と答へたので、一休カラ／＼と笑つて、遂に深い交りを結ぶ事になつた、此の一路居士といふのは、深く禪機の三昧にはいつてゐて、少しも世上の

事なきには頓着しない男であつたが、庵の柱に畚を釣るして、心ある村人又は往來のもの、喜捨を受け、夫れを手取鍋にて命を繋いでゐた、そして常に

手とり鍋己れが口かさしぬれば

雑炊たくと人に語るな

と口吟んで、悠々と此の世を送つてゐた、スルト一日の事、一人の村人が悪戯に一足の馬杵を其の畚の中へ入れて置いた、それを見た一路は、「うむ、我が糧も最う盡きたのぢや」といつて、夫よりは食を斷ち、遂に入寂して仕舞つたのであつた。

二七 一休の戀煩ひ

處が一休は一意専念に法を求むる、朝な夕なの苦心でやつれ果て、今は見る影

もない姿となつた、頭の髪は蓬々と伸びて、顔の色蒼白く、迎も此の世のものとは思はれぬほどであつた。

それを見て眉を蹙めたのは、華叟や二三人の友達であつた、寄々一休の身の上について話し合つてゐたが、此の時一人が、△此の頃の一休はさうも變ぢや、世の中に窶れたものも多いが、アノやうなものは見た事がない、なんしろまだ血氣盛んの身でありながら、アんなになると云ふは、ヨクくの事ぢや、大方一休だからとて人間だから事に依ると戀煩ひと云ふやうなものではあるまいか、○成る程或はそうかも知れぬ、もしそうとしたら好み甲斐に、何んとかしてやらねばなるまい」と評議は略戀煩ひと云ふ事に一決したので、其のうちの一人が或る日一休の處へ来て見ると、一休は寂しい部屋の中只一人、坐禪を組んで、三昧にはいてゐる、うるさいとは思つたが、平素別戀にしてゐることを、其の儘追ひ

返す譯にも行かない、
 「兎も角も之れへ」と部屋の中へ入れた、挨拶も濟んで
 茶の仕度をしてをると、件の男は夫れを制して、男「いや一休どの、茶なきは
 いらぬ、聞けばこの頃お加減が悪いとやら、夫れについて我々申し合せ、華叟和
 尙ども話し合ひ、チト伺ひたい事があつて参りましたので、
 「は、あ、さやうかな、いやなに加減が悪いと云つても、大した事はないので、
 男「處が、傍から見ると、大したちがいで、大心配なですよ、ね一休さん、わしらはこうして
 永年知己になつてをれば、眞逆の時には他人とは思はれない、さうでせう、之れ
 迄の好み甲斐に、一う打ち明けて下さつては、
 「ナンですな、好み甲斐だの、打ち明けてくれとは、
 男「いや、さうお隠しなさると申しませうか、お前さんは
 ……
 乾度戀煩ひなんでせう、何も悪い事ではなし、若いうちは有り勝さ、夫れな
 らさうと打ち明けて下さりやあ、わしらも其處で一肌脱がうといふ譯なんですが

さうか打ち明けて下さらんか……」
 飾らぬ言葉に熱心はホノ見へてゐた、一休は心の中に可笑しくもあり、馬鹿
 くしくも思つたが、一つからかつてやらうといふ氣が起つて、神妙らしく眞面
 目な顔して、
 「それはさうも御親切に有難うござる、いやさう迄に仰しやつて
 下さるのは渡りに舟、實は戀も戀も命をかけた戀で、叶はぬ時は死なうと迄思ひ
 つめてゐるので、わつへ……いやはやさうも面目次第もない事で……」と、云ひ
 つ、悄然として差し俯向く、之れを聞いた友達達は心の中で、男「ソレ鑑定通り
 だ、矢張り人間は人間、幾等道心堅固だの、名僧善智識だのと云つたつて、此の
 道ばかりは別なものだ……」と思ひながら膝を進めて、男「だから申し上げたの
 で、就ては肩の入れ工合もさうなんだから、お前さまの想いものといふのを聞かせ
 て貰ひたい、何處の誰なんで……」と乘氣になつて聞く、一休はワザと迷惑さう

に顔を反向けながら、「どうもお恥かしい次第で、面目次第もない、私が口で云ふのは餘り恥しいから、一つ字で書いて差しあげやう、その代り歸つてから見ても貫はねばならぬ、◎「イヤ承知いたしました、私もこの道ちやア若い時分、少しは苦勞した事もあるので、その邊はお察し申しますよ……」一人で合點してゐる、一休は筆をとりあげ、サラ／＼と、何か認めて渡した、書付を受け取つた男は鬼の首でも取つたやうな氣になつて、悦び勇み家へ戻つてきた、三四人の友達は待ち受けてゐる。

□「オ、御苦勞／＼、どうであつた、和尚の様子は……、◎「イヤ、様子も様子も大容子さ、何んしろこの戀が叶はなければ死んでしまふと云ふ大事件なんで、□「ヘエー、それはどうも大變な惚れやうぢや、シテ見込みをつけた女と云ふのは、◎「この誰で……、◎「そこが命なんだ、何んしろ恥しくつて口では云へな

いと云ふので、これこの通り書いて出したのだ、□「なる程、人間には變りはないや、ドレ一寸見やうぢやないかね……」人々は云ひ囃ながら、その書附を開けてみるに、

本來の面目坊がたちすがた

一目見るより戀とこそなれ

われのみか釋迦も達磨も阿羅漢も

この君ゆへに身をやつしけり

と云ふ二首の歌が記してあつたので、一同はアツといつたばかり、暫くは開いた口が塞がらなかつた。

一休の心は飽まで世俗を抜いてゐたので、形式なぞと云ふ事は、少しもその眼
中になかつた、眞珠庵にゐる時も、外出の時も、常に見得のない、粗末な衣を
纏ふてゐられる。或る時一人の富限者が法筵を設け、多くの僧侶を供養すると云
ふ事を聞いたから、一休もノコノコその家に出かけました。

そして玄關に立ちながら、一頼むく、御法要と承はり、回向にまゐつて
ござる」ともうし入れると、家のものは飛んで出たが、その姿が餘り粗末なので
チヨイと見ると乞食坊主宜しくだから、モヂくしながらこの由を主人に取り次
いだ、主人はこれを聞いて、主さうか、大方街道あたりの辻堂の堂守位であ
らう、何も功德だ、紙の一帖に鳥目の五十もやつて、香のものでも宜いから齋食
でも振舞つてやれ」主人の命だから取り次のものは、澁々禪師を一間に案内した
禪師は委細構はず讀經をして、貰つた紙と錢を懐中しながら、すんく歸つてし

まつたが、心の中では流石の一休も、餘りの無禮にムツとしてゐる、スルト間も
なく又その家で供養があると聞いたので、一休心の中に悦んだ、一ヨシく
今度の一つ方便で諭してやらう」とその日を待ち構へてゐた、聽て當日になると
一休はこれまでにない立派な袈裟衣を纏つて、再びその家へ出かけた、物持の
法要と云ふので、屋敷のうちの賑しさは又格別であつたが、一休が玄關に立つ
と、取り次のものは飛んで出た、丁寧に手を支へて、一お越しなさいまし、
一「御苦勞でござる、別用ではござらぬが、御靈前へ御回向をいたしたいと存じ
てまゐりました、一これはどうも有がたう存じます、どうぞ此方へ……」取次
のものはベコく頭を下げ、今度は主人にも尋ねないで、前とは違つた、立派な
座敷へ案内した。

一休は心のうちに笑つてゐると、聽て主人は立派な聖がきたと云ふので、袴

の折目を正して挨拶に出て来る、主「これはお聖には、宜うこそおいで下されま
した、まづ御休の上回向を願あひまする」と述べて引き下つた、以前とはスツ
カリ扱ひが違ふ。

そのうちに回向も済んで、いよく饗應と云ふことになつた、處がサア大變、
出るはく山海の珍味、勿論精進料理ではあるが、有らんかぎりの佳肴を持ち出
す、「イヨ、大したものだな……」と思ひながら、悠然と構へて居る、いよ
く箸取りと云ふ段取りになると、この時一休はなんと思つたか、ツイと立つて
俄に衣を脱ぎ始めたので、人々は吃驚した、「オヤツ、これからが式膳だど
いふのに、坊さんどうしたのであらう……」主人も怪しみながら見てゐると、一
休はセツセと衣をたゝんで、自分の座つて居たところへチャンと据へ、自分は縁
に出で、柱にもたれ黙然としてゐる、この有様を見て一同は呆れ返つてゐたが、

黙つて居られぬから、主人は一休の側へ来て、主「これは御僧どうなされた、手
前には一圓合點がまゐりませぬ」と尋ねた。

今まで黙つて目を閉ぢてゐた一休は、クワツと兩眼見開き、「アイヤ俗衆よ
く聞かれよ、愚僧のいたし方が不審と想はれるであらうが、決して怪しくも不審
でもない、拙僧今日饗應を受けたが、それについて想ひだすは、先頃御供養の時
でござる、その節愚僧は眞に粗末な衣を着てまゐつたから、紙と鳥目五十文、
それに粗飯の御供養があつた、然るに今日は斯くのごとき饗應に預かること、こ
れ畢竟美しき衣を着てきた爲である、シテ見ると、今日の法膳は拙僧に下され
るのではなく、全く美しい法衣にくだされたものと心得たので、それでこの通
り法衣を膳に据へたのでござる、アハ……」滔々と説き破り、一座を睨みまわし
た、主人も理の當然に赤面して、その罪を謝しながら、主「シテ御僧は……、

「私は紫野大徳寺の休でござる」
これには一同二度吃驚、頻りに不明の罪を陳謝したと云ふ事である。

二九 狂歌の訴状

こゝに江州に鳥山村と云ふところがあつた、その領主は六條右衛門太夫と云ふのであつたが、その家老を勤める久瀬又右衛門と言ふのは、貪慾非道の人物で常々から大層領民をいぢめちらし、何やかやと言ふ口實の下に、年貢の絞りとりをしてゐた。

ところが此度もお上の入用とあつて、澤山の賦役の達しがきたので、村民一同弱り切つて、處々方々に寄り合ひながら、いろくく協議をして居る、
困つたものだが、何んとか工風はあるまいか、
ソリヤ他々の領主さまなら

兎に角だが、何んしろあの久瀬と言ふ家老が居ちやア、トテも聞き入れてはくれまい、
「と言つてこのやうに太した御賦役ぢやア勤め切れないが、さうぢやな一つこの頃名高い一休さまの處へ行つて、何んとかよい智慧を、借りてきてはぢんなもんであらう、
「オ、それく、宜いところへ氣がついた、それでは一つお願いもうして來るとしやう……」
禪師の名は界限に知れ涉つた居るから、早速村の重立つものが相談をして、三四人の村惣代が遙々紫野へやつてきた、禪師は人々を座敷へ通して、

「何か願ひがあると言ふか、さんな願ひかな……」
氣輕に尋ねる、
「フム、一生の實は禪師さま、一生の願ひがあつてまゐりましたので……」
「ではもうし上げますが願ひとは容易ならぬ事ぢや、兎に角話して見なさい、
實は私さもの領主さまは六條右衛門太夫様でござりまして、家老に久瀬又右衛

門と言ふのがござります、これがどうも恐ろしい剛愎の人で、これ迄も引ツ切りなしに御用金を取られました、今度もまた御用の達しがありました、それで一村は度々の事で困つて居ります、就ては何か御免を願ふ工風はなからうかと言ふ譯で、ワザ／＼伺ひましたのでござります、何うぞ一つ智恵をお貸しなさつてくださいまし……」と、總代から恐る／＼頼み込んだ。

禪師は黙つて聽いてゐたが、やがて一同に、「それはどうも難儀であらう、定まつた賦役なら詮方もないが、さうとり立てられては堪まるものではない、ヨシ／＼、多くの人の爲であるから、私が一つ訴状を書いてあげる、それを直々領主様の方へ出しなさい。」
 「ハイ、どうも有がたう存じます、それでは一つお願いひもうします、」
 「ヨシ／＼、何かな村が鳥山で……家老が久瀬又右衛門と言つたの、」
 「ハイ左様でござります……」
 禪師は机の方をむいて、一枚の紙にサラ

／＼と書きつけたのは一首の狂歌であつた。「サアこの通り認めたらそれを持つて行きなさい」村人は悦んで、「ハイ／＼どうも有がたう存じます……」
 口では言つたが腹のうちでは、「どうも滅法早い書やうだが、一体何んな訴状であらう」と想つて惣代が額を集めてその書付を見るに

又もまたとりてもきかぬ一村の

農具残らずくせやどり山

と言ふ狂歌であるから、流石の村人も呆れ返つたが、「エ、禪師さまちよつと伺ひますが、これは狂歌と云ふもので……」
 「マア、さやうぢや、」
 然し禪師さまこんなもので願ひが通りませうか、「こんなものとは何んだ眞逆これが分らぬやうな領主でもあるまい萬一これが分らぬやうであつたら、構はんから蒔旗でも竹槍でも擔ぎだして、一揆を起せ……」
 豪い權幕なので百姓總代

は驚いで歸つて行く、が何んしろ名高い禪師の書したものだからと言ふので、兎も角も當つて碎けよと言ふ考へで件の書付を領主の手許へさし出した、領分の人民から、直々の願ひと聽いて右衛門太夫は、想はず眉をひそめたが、主「ハテな何んであらう、身には久瀬といふ老臣もあるに、それをさし置いての願ひとは合點が行かぬ」と、思ひながら急ぎ訴狀を開いてみると、中から現はれたのは一首の狂歌であつた。

主「なんだ、狂歌とは不届き千萬である、これは予を愚弄いたす考へであらう、それにしてもなんと書いてあるか……」ブリ／＼怒りながらヨク／＼読み碎いてみると意味が分つたときみへ、ハタと手を打つて、主「ウム讀めた／＼、これはなんでも久瀬又右衛門を讒訴しやうと云ふのだが鳥山の領分にこれだけの歌を讀み得るものはない」と思つて調べてみると、一休禪師のさし金と云ふ事がわかつた

から、六「フム、スルトよく／＼調べなければならぬ……」と早速嚴重に取調べると案の條又右衛門に後暗い事があつたので直さま家老職を取りあげ、時ならぬ賦役は一切御免と云ふ事になつたので、江州一圓の村民は、これを聞き傳へて一層禪師に心服したと言ふ事である。

三〇

養命補身丸

年の瀬もはや眼の前にせまつた極月の中旬すぎ、小作といふ大の貧乏人がトボ／＼と禪師の庵室を訪れた、貴賤貧富を眼中に置かぬ禪師は、快く小作を一室に通して茶を薦めた後、「お前は今日なんの用で來たな」小作は恐る／＼聲震はして、小「これは禪師さま、私のやうな貧乏人がお尋ねしまして、さぞ御不審でござりませう、實は禪師さまをお見込み申して、是非一つお助けをして

戴きたいたい事がありましたして参上いたしましたので……。「アム人を助けるは出家の役ぢやが、何か悪い事でもしてそれで私に仲裁してくれと言ふのか、小「これは滅相な、京中に響いた貧乏こそすれ、これでも悪い事は爪の垢ほごもした事のない小作でござります、貧乏小作に正直小作と言ふ二つの名前を持つてる私なんでござりますから、悪い事なんかは微塵もいたしません、他ではござりませぬが、サテ勝たれぬは貧の病四百四病の外の大病、これには私も困り切ります、殊に今日はハヤ十二月の二十日、どうしても年の瀬を越さうやらと思ふとホト／＼生きた心地もいたしませぬ、それにつき想ひ合しましたは禪師さまのお慈悲、どうぞ人一人お助け下さると思召して貧病にきく金銀丸とやらを少々お恵みなさつて下されまし」

と兩眼に涙を含ませながら鼻を詰らせる、禪師これを聞くと目を閉ぢりてジツと小作の云ふ事を聞いてゐたが、やがて兩眼を開いて、「善哉／＼、鳥の將に死なんとするやその鳴く聲悲し、人の將に死なんとするや其の言よしとかや、お前が今貧乏のドン底に居りながら、悪い事をしやうと言ふ心を起さず、殊勝にも法衣の袖に縫つて利益を得やうと言ふのは、神妙な心がけぢや、年でも明けたら身を粉にして一心に働くと言ふが、それもその通りぢや、ヨシ／＼憐なお前の心にめで、願ふ處の妙薬を私が授けてやらう」と言ひながら別室に立つて行つたが懸て一包の金を持つて來て。

「サアこれが妙薬ぢや、はやく持つて歸つて服用したらよからう」と、小作の前へ出した、小作は有難涙にかき暮ながら、小「ハイ、これは禪師さま、有がたう存じます」と言ひつゝ、幾度か押し戴き、ヒヨイと包の上をみると達筆で養命補身丸と書いてあつた。

三三 筍の手討ち

或る頃禪師は、愛弟子蝮川新左衛門の隣地に庵を結んで居た事があつた、スルトその年の三下旬、自然の陽氣に誘はれてこゝかしこの藪に筍がニヨキくと出た、禪師の庵室に續いた藪にも五六本ニヨキくと出た、藪の隣は新左衛門の書齋の庭で、毎日丁寧に掃き清められて居たのであつたが、藪の竹の根が垣の下を通つたものとみへて、いつとはなしに、二三本の太い筍が庭前にはへた、この二三日忙しい事があつて、新左衛門は書齋に這らなかつたが、今日は少し閑を得たので書見でもしやうと、ノソリ書齋に入り込み、第一に目についたのは筍であつた、新「オヤツ、あすこに何かはへたやうぢやぞ、何んであらう……」庭下駄はいて庭に降りて、ヨクくみるとどうも筍らしい、新「ハ、

ア、筍だな……」そこ等をみると三本はへて居る、新左衛門心の中に、新「ハ、アこれは禪師殿の庵室の藪からきたのだな、待て〜一番これでもつて和尚を驚かす工風がありさうなものぢや」と、想ひながら座敷へ歸つて頻りに思案をしてゐたが、應てハタと膝をたいて、新「ウムある〜、これなら師の坊も凹むであらう、甘い〜……」一人は、笑みながら、再び椽側に立ち出で、庭男を呼んだ、庭まわりの仁助は何事が起つたかと、急ぎ駈つけてくる、仁「旦那様、何か御用で……、新「言ふまでもない、用があるから呼んだのだ、仁「へエー、新「手討ちにするから、早く鎌を持って来い……」手討ちと聞いて愕いたのは仁助だ、仁「ダ、旦那様、タ、誰をお手討ちになさいますので……、新「誰れも宜いから早く持て来い、それからヨク切れるのを持て、仁「よく切れるのつて旦那様、幾等何んでも鎌でお手討ちが、新「分らん奴だな庭にある奴

を手討ちにするにはどうしても鉄でなければならぬ、仁「エッ庭にある奴……ハ
 テナ、庭にある奴と言ふは私一人しか……」邊りをウロウロ見まわして、モウ
 ガタ／＼震へ出した、仁「モ、モシ旦那様、何か私に粗相でもござりましたか
 ヒヨツとしたら私をお手討ちになさるのでは……こいつは堪まらぬ……」早逃
 け出さうとする。

新左衛門はこれを見てブツと吹き出した、新「アハ……コリヤ仁助待て、何も
 其方を手討ちにするといふのではない、ソレ見ろあれに筍が三本はへて居る、
 あれを手討ちにすると言ふのぢや、仁「へエー、さやうでござりますか、私は
 墨丸を上げたり下げたりしました、ヤレ／＼、ヤツと安心した、成るほどあすこ
 に三本はへて居りますな、それならさうと早く仰しやつて下されば宜いに、私
 は壽命が十年も縮みました、新「アハ……氣の毒であつた、判つたら早く鉄をも

つてこい、仁「へエ／＼もつて参りますとも……」仁助はヤツと胸なでおろし、
 一挺の鉄をもつて来た、仁「サア旦那様これでスツバリおやりなされまし、新
 コレ／＼生意氣なと言ふな、サア寄越せ……」新左衛門は鉄をさけてツカ／＼
 筍の側に進み寄つた、世の中に人間ほど弱いものはない。

此場合相手が人間であつたら、手討ちと言へば大騒ぎがもち上るのだが一方が
 無情の茸だけに頼る泰然自若としてゐる、この不言不語の相手に對して新左衛
 門は、悠々と引導を與へた、新「ヤイ茸の子、よく承はれ、汝無情の分際
 して、無斷にも武士の邸内に入り込み、ニヨキ／＼と頭をもたげるとは不届き
 千萬である、よつてこの場を去らせず手討ちにいたすから残すところなく観念
 いたせ……」と言ひさま鉄を取つて立ち向つた、仁助は目をバチクラせながら、
 仁「オヤ／＼茸の子に向かつて因果を含めてござるぞこいつは面黒いな……」ジ

ツと見てゐると新左衛門は、エイと叫んでザクリ鍬を打ち込むと、一本の茸がコロリと倒れた、新「アハ……見かけによらぬ脆い奴ぢや、ドレモ一つ……」又エイツ到頭三本ながら根元から切り取つてしまつた、仁助はこれを見てツイと進み出で、仁「イヤ旦那様、美事なお手の内でござります、それではこの死骸は……、新「本来なら取り捨つべき奴であるが、それも餘り不便であるから、勝手向きで葬つてつかはせ」言ひ捨て、新左衛門塵打ち拂ひ、ニコ／＼として座敷へ戻つた。

これよりさき、一休禪師の處にゐる一人の小僧が、遊び半分竹藪を見まわしてゐると、隣の庭で何か話し聲がする、何氣なしに垣の破れから覗いてみると今しも新左衛門が引導を渡して、三本の茸の子を成敗するところであつた、小「オーヤオーヤ、こつちから潜つて行つた茸の子を堀つてゐるな、何んだ手討ちにする

と……オヤ／＼と／＼三本ともほつてしまやアがつた……、ナニイ死骸は本来なら取り捨てるのだが不憫であるから、勝手向きで葬れ……、イヤ甘いことを云つてるぜ……」ドシ／＼和尚のところへやつてきて、□和尚さま／＼、今手討ちがござりました、一「なんぢや手討ち、一体それはそばか人間か、□イエそばでも人間でもござりません、茸の子で……、一「ナニ、茸の子アハ……、茸の子の手討ちとは古今未曾有だが、さう云ふ譯なのだ、□ハイ、その譯は箇條／＼でござります」

と残らず物語つた、禪師はこれ聞いてニツコと笑つた、一「なる程な、聞いてみるゝ茸の子の手討ちに違ひない、大方新左め、私に鼻を明かさせやうと云ふ考へであらう、ヨシ／＼それなら此つちでも一つ掛合を持込んでやらう」と心利いた下男の武平に何か云ひ含めて、新左衛門の屋敷へ遣はした、武平は直さま

支度をして、手頃の竹籠を携へ、グルリと門をまわり新左衛門の處へきた、
 武「手前は一休からの使者でござります、何とぞ旦那様にお目にかゝりたうござ
 ります……」これを聴くと新左衛門、新「ハテナ、何んだか改まつた口上振り
 だが眞逆昔の子の一件は知りはないであらう、一体何んであらう」と想ひなが
 ら早速面會をした、新「コレく一休殿の使ひ何事ぢや、武「これは旦那様、手
 前主人よりの用向は、外ではござりませぬ、聴きますれば只今罪人を御成敗なさ
 れましたとやら、右につき死骸の儀は役目にまかせ、こちらへお引渡しを願ひた
 いとのとでござります」これを聴くと新左衛門、アツと驚いた、新「イヤこれ
 はく實は手前方よりお知らせいたさうと存じて居たのであるが、先を打たれて
 恐れ入つた、併し罪人死骸の儀はお手数を煩はすもいか、と存じたので、最早
 手前臺處において葬つたからこの由、和尚殿に申し上げて呉れるやう、それか

らせめて形見として衣類だけは差しあける、サア持歸つてくれるやう……」茸の
 子の皮を一枚残らず差出した。
 使者は面喰つてその儘スゴく立歸り、和尚にこの話を話すと、和尚も案に
 相違したので、カラくくと笑ひながら、「アハ……新左も大分話せるやうにな
 ったわい」と云つて大笑ひをした。

三三二 喉痺の妙薬

このに都の片ほとりに、仙人氣取りの老人があつた、この老人何事でも知ら
 ぬことは云ふ物識であつたが、殊に喉痺の妙薬を知つてゐると云ふので、
 その名が遠近に聞えて居た、スルトその頃洛中洛外にはその喉痺病が流行して
 人民は大層難澁をしてゐる、これを聴いた禪師は、「このやうな時に喉痺の妙

薬の薬法を廣く大勢のものに知らせたら、この上の人助けはない一つ例の老人から聞き出してやらう」と想つたので、或る日禪師はノコノコ老人の隠宅へ出かけた、何んしろ名高い大徳寺の一休が訪れたのだから、老人大いに喜び、一間へ案内して香り床しい煎茶を薦めて、何くれとなく四方八方の話しに興を咲かせてゐた。

スルト禪師は急に形を改めながら、老人にむかつて「實は御老人、今日は餘義ないお願いがあつて参りましたのぢや、老」ナニ禪師さまのお願いとは、近頃榮あるとでござる、何んなりとも仰せられたい」禪師は膝を進めて、「イヤ早速の御承知 忝なう存する、就ては御老人には喉痺の妙薬とやらを承知の由で……、老」ハイ、それは愚老の家傳でござるが、それがどうかいたしましたかな、「サアお願いと申すはこゝでござる、なんと御老人一つ私に教へて下さら

ぬか、老「これはしたり、家傳と云へば秘密の法、なか／＼以て口傳はなり申さぬ、こればかりは禪師の言葉だがお許し下され、一「御尤も／＼なれど私もワザ／＼それがために参つたのだから、是非御傳授下さるやう……」禪師が強て頼むから、老人も困り果て、暫く案じて居たが一方は當時著名の禪師、殊に由緒高き紫野大徳寺の住職であつてみると、さう無下に斷ると云ふとも出来かねるので、老人も溜息をつきながら、老「他ならぬ御所望でござるから、餘儀なくお傳へいたさう、シタガ他のものへは金輪奈落、斷じて口授せぬと云ふ御誓文が戴けませうかな……」和尙はうなづきながら、一「勿論それは承知でござる、誓文如何にも容易いとでござる」と即座に誓文を認めめた。

モウ斯うなつては嫌とは云はれないから、老人は惜しいながらも、その妙薬の秘傳を和尙に口授したので、和尙は大喜び厚く禮をのべて大徳寺に歸つた、直

に役僧を呼び出し、「コレ〜大工を二三人呼んできてくれるやう……」役僧達は怪しんで「なんで和尚さま大工なごを呼ばれるのであらう、別にこれと云ふ修繕の箇所もないやうだが、ハテナ……」想ひながら大工を呼よせた、和尚は大工に指圖をして、忽ち三四十本の高札を拵へさせた、
 「オヤ〜高札が出来たぞ、何んになさるのか知ら……」イヨ〜怪しんでゐると和尚は委細構はずドシ〜墨を摺らせ、自分は衣も何もはねのけ、坊主頭に鉢巻をして高札一枚〜へ下のやうな文言を書きつけた。

一 喉痺薬のと、モシ喉痺を病むものあらば必お蜜柑の實を黒く焼きてのむべし、治ること速かにして再び起ることなし
 これ奇代の大妙薬なり

一生懸命になつて書終つた和尚は、額の汗を拭ながら、一「サア出来た〜

人助けの高札が出来たぞソレ早く人足を雇つて辻々へ建てさせよ……」魔誤〜してゐる役僧を叱り飛ばしながら、方々の辻々へ建てさせた、サアこれを見た洛中洛外のものは大喜び、
 「ソレ喉痺病の妙薬が出たぞ〜、
 △「ウムこいつは有がたい……オイ押すな〜……」
 ◎この高札の前も、ギツシリ群集で一杯になつて居るので、和尚はブラリ〜と見まわりながら、獨りホク〜悦んでゐる、スルトこなた老人、これをみると烈火の如くなつて怒つた、
 老「なんだ一休め、喉痺の妙薬の建札をしやアがつて不都合千萬な奴ぢや、決して口授はせぬと約束してチャンと誓文までかいて置きながら、高札を建てるといふのは奇怪な仕打ち、己れ賣僧奴、何うしてくれやう」

ブン〜怒つて大徳寺へ乗りこんできた、年は老つても頑丈な老人、殊に怒り心頭より發して居るから、その權幕物凄く、ドシ〜玄關へかゝるが早い

老「ヤイ一休の糞坊主に逢ひに来たぞ、嘘つき坊主の一休め、これへ出る……」
 怒鳴り立てる、驚いたのは役僧だ、この体をみるに膽を潰した、
 〇「ウワー大變な奴が舞ひこんできたぞ、苟そめにも大徳寺の勅住活佛までいはれた和尚
 さまを糞坊主のウツつき坊主のこ、こいつ大方氣でも狂つてゐるであらう」と想
 ひながら恐るゝ老人の顔を覗きこんでゐると、老人は、老「ヤイ納所坊主奴乃
 公の顔には何も書いてはないぞ、何をジロく覗きやアがるんだ、何でもい、か
 ら早く狸坊主に取り次けッ……」とフイく唸き立てる、この聲が奥へ聞へる
 と一休和尚はカラくゝと笑つて、
 「「イヨー来たぞく、奴さん大分ブンく
 してゐるな、コレく誰かはやくお通し申さぬか……」座敷の方から怒鳴り立て
 、役僧共は慄へをつた。

役「ヤア大變く、前の方は暴風雨で後の方は雷だ」
 吐きながら早速老人を

一室に通す、處へ一休和尚ニコく笑ひながら夫れへ出て来た、
 「「これは老人ヨクお越し下された、サアこちらへ」
 挨拶したが老人は挨拶處の騒ぎではない、突然開き直つて、
 老「アイヤ一休ヨクは參らぬ、併し一休之れは覺へてを
 らう」と云ひさま、例の誓文を出して叩きつけた。

一休は平然として、ニヤリくゝと笑ひながら、
 「「マア老人、そう腹を立て、は少しも理合が分からぬ、成る程此の誓文こそ正しく愚僧が直筆、
 佛の手を偽りは申さぬぢや」
 一休の此の言葉に老人は、マスくゝせき込んで、自ら眉を
 ビクくさせながら、老「此の誓文を承知する以上は、ナゼアンな高札を建てた
 苟そめにも勅住とか名僧とか活佛とか、たへられる御坊としては餘り不都合
 極まる話してないかサア返答は如何がでござる」と嵩にか、つて詰寄せた、
 一休は泰然自若として、老人を手で以て制しながら、
 きつとなつた、
 「「老人、全

体此の誓文には何んと書いてござるな、老「コ、之れは奇怪の一言、慥に口授ならずと書いてござる、」
「コレ〜然らば何も申し分はない筈ぢや、愚僧が建てた高札は、コレは口授ではない書授だ、決して口では授けぬ書いて授けたのじや、夫れでもアノ高札が一休のやうな大口開けて、大妙薬でも云つて怒鳴つてをりますかな〜」
理屈づめに遇はされて流石の老人もグツと言句に詰り、老「ウ、シテ見ると文句は云へぬ譯だ、一休殿愚老はすつかり閉口いたした……」
頭撫で〜苦しそくに笑つしめる。

「アハ……實は人助けの爲め老人を一杯掛けたのぢやマア人の爲め世の爲ぢや勸辯さつしやい……」
果は互ひに大笑ひとなつた。

三三三

チンチクリン踊り

こゝに江州に竹林寺といふ寺があつた、この寺の住職は大層面白いたちであつたが、惜しい事には非常に身の上が低かつた、併し幾等ミエ坊でも夫れ相當の學問も出き、氣象も面白かつたので一休も始終往來をしてゐた、處がこの和尚一人の美少年と語らつて、密に懇勸を通じてゐた、然るに何うしたものが、この頃其の美少年がサツパリ姿を見せないの、住持は頗る鬱ぎ込みながら、度々手紙をやる。

夫れでも美少年は來ないで、只々親兄弟が喧しいのでこられぬ、そのうちには何と来して来るから、夫れ迄辛抱して呉れと云つて来るばかりであつた、斯くなるに住持の心は猶更惱んで来て、毎日毎夜怏々として樂ますといふ有様であつた、住「あ、あ、さうして姿を見せぬのか知ら、或は他に話相手でも出來て、夫れで此方を見限つたのではあるまいか」と思ひながら或る夜、宵の口から

枕につき、獨りクヨク考へて居たが、何か用があると思へ 往「久作く……」
 「寺男を呼び立てた、寺男の久作は晝間の疲れで、ウトリク居眠りをし
 て居た、ナカク住持の聲が耳にはいらなく、相變らずコクリク舟を漕いで
 居る。

と流石の住持も疝癥を起して、一段聲高く、住「久作は居らんか」久作ハッ
 と目が覺つて、久「アーウハーイー」欠伸交りの頓狂聲で、漸く返事をしながら
 住持の部屋へやつて来た、久「へい何か御用でございますか……」、住「久作、ナ
 ゼはやく返事をしないのだ、あれほどよぶのが聞こへないのか、久「へい、實は
 餘り疲れましたので、ツイ其の……」、住「ナニ、疲れたから返事が出来んといふ
 のか、貴様は何んの爲にこの寺に在るのぢや、白痴奴……」云ひさま手近の枕
 を取るがはいか、日頃の不平が一時に起つて久作の眉間を目かけ、ヤツと投げ

つけた。

久作は吃驚して、よげやうとしたがモウ間に合はぬ、枕は發矢とあつてタラ
 く血が流れる、久「あいた……」、御勘辨を……」久作は流れる血汐を押さへ
 ながら、一目散に臺處の方へ逃げ出した、其の途端、ヒョッコリはいつて來ら
 れたは一休であつたが、この体に驚いて、一「コレ久作、何をそんなに泣いて
 居るのぢや、其れに眉間から大層血が流れて居るではないか、久「之れは一休様
 で……實は私の返事の仕方が遅といつて枕を投げつけましたので……」、一「さ
 うか、そんな竹林寺でもないが、何かムシヤクシヤしてゐる事でもあるのであら
 う、ヨシくわしが謝罪てやらう……」云ひながら一休はツカク住持の部屋
 にはいつて見ると住持は床の上にあぐらをかいたま、ボンヤリして天井を見詰て
 るる、一「オ、竹林寺、一休だよ、一体今夜は何うしたといふのだ……」よびか

けられて住持ハツと氣がついた、慌て床を押し丸めながら、住「イヤ一休どの飛んだ處へこられた、ナニ別に之れといふ事もないのぢやが、わしもチトムシヤクシヤしてゐた處なので夫れでツイ……」
 「さうだらうとも、ダガ一体何んでさうムツヤクシヤするのだ、大方美少年の事でも考へてゐるのではないかアハ……」
 笑い紛らしてゐる。

竹林寺の住持は一休に圖星をさ、れて、ギョツとしたが、目から鼻へ抜けてゐる一休に向つて、今更隠し立てをするでもないと思つたから、極り惡氣に顔を撫でながら、住「イヤ恐れ入つた、何を隠さうお察しの通りで、近頃鬱ぎ込んでござる、夫れが爲め、心にもない腹を立て出家に似合はぬ仕義、なにぞぞお笑ひ下さるな」と住持は萎れ返つてゐる、一休はこれ聞いてカラ／＼と笑いながら
 「アハ……イヤ氣の弱い事ぢや、何も夫れしきのことクヨ／＼するにも及ばな

いノオ竹林寺……、住「と云つて近頃奴めが少しも姿を見にこぬで……、何うも豪い執心ぢや、迷へ／＼迷ひ詰たら覺めもしやうが、何うぢやな、其の美少年の來る名法の傳授をしやうかな……」
 一休は斯う云ひながらニタリ／＼笑つてゐる、名法と聞いて住持はイツ／＼とししながら、住「夫れは耳よりの事でございます、何卒皆傳を願いたい……」
 一休は一膝のり出し、
 「宜しい、傳授しやうか當寺に錢はあらうな、住「錢と云つて少々ならある、何なら檀家の方へでも、
 一「イヤ少々で宜しい、夫から菜はあるかな、住「イヤモウ菜つ葉なら澤山ござる、
 一「さうであらう、夫れからモ一つ小糠はござるかな、住「有るともノハ
 ウ分かつた、菜の糠漬でも拵へて錢で酒を買ふといふ一件だな、
 一「馬鹿な、そんな事ではない、黙つてゐるが宜い、其の三品を少々づ、紙に包んでソツと其の美少年に届けるので……」

住「フーン、夫れは何んの造作もない事だが、一休何ういふ禁厭なので……、
 一「エ……御身には似合はぬ事ぢや、なぜこぬかといふのだよ……、住「ナー
 ル程アハ……」二人は腹を抱へて笑つたが、之れが爲め住持の機嫌も直つて、
 住「近頃愉快な事ぢや、デハ改めて一献といたさう……」聽て酒宴となつた、
 亂にはいたらぬが酒は一休の好物、大体一休は物に頓着せぬたちであるから、
 或る寒い日に、

世を捨て、身はなきものと思へども

雪の降る日は寒くこそあれ

と口吟びながら、居酒屋へ込み飛び飛んで、キユーと熱燗で一杯、
 「ア、ア美味い
 く」と、舌舐すりをしながら、

極樂は何處の果と思ひしに

杉葉立てたる又六が門

と吟じて居酒屋又六の宅へヨク出入りしたくらの一休だから、酒は大好物、
 主客 忽ちのうちに十分の酔を催うして来た、住職も一休の取り成しで、ガク
 リと胸が晴れたので、之れもグイグイあほつて、はや大分上機嫌になつた、この
 時一休は盃を下に置きながら、
 一「ア、何うも面白くなつてきた、デハ一つ
 踊らうかな……」ヨロ／＼しながら立ちあがつた、住「イヨー一休どのが踊ると
 は珍らしい、一つ拜見をいたそう……」住職も興に入つて見てゐると、一休は
 ソロ／＼坊主頭に向かふ鉢巻をしめ込みながら、座敷の真ん中へ踊り出て聲張
 り上げて節面白く

君が來ぬとて枕が知ろか、枕な投げぞ、
 咎はなし、ちくりんち
 くりん／＼、さなちくりんぢやほごに、
 きのそんよな、をどり

はかんにさでちやせんやつとんさ
唄いながだ、足拍子を取り、ドーシ〜と踊り廻つたので、住持も久作も腹を抱へて大わらひ、遂に住持の鬱ぎこみも、これが爲めスツカリ忘れて仕舞つた。

三四 聲 判 断

或る日の夕方少し前に一休は、ブラリと大徳寺を出た、去る町外れを通りかゝると一軒の家の中から、サメ〜と泣く女の聲が洩れたので、一休は不圖足をどめた、
「ハテナ何だか悲しさうな女の泣き聲がするとはどうしたのであらう……」慈悲を旨とする出家の身殊には義氣に富んだ一休の胸には逸早くも不憫といふ心がムラ〜と起つてソツと圍の節穴から覗いて見た、中は薄暗くなつてゐて、ハッキリとは見へないが、一間の佛壇にはドンヨリとした燈明を點し

其の正面にまだ生新しい位牌を据へて、前には一人の中年増の女が袂を顔に押し當て、サメ〜と泣き伏してゐる、
「オヤツ可哀想にアノ位牌はこの女の良人の記念であらう、別れて悲しいと身へ泣いてゐるのだな、可哀想に……」
一休は頻りに憫れと思つてゐたが、不圖耳をかたむけて、
「併し待てよ、何うも腑に落ちぬ處がある……ハテナ之れは不思議ぢやわい……」
呟きながら二三日間行き過ぎ小首を捻つて。

「夫れにしても、何うしてこのやうな事になつたのであらう……」
なにかかかんがへながら、十間ばかり先の居酒屋へ飛びこみ、一本の酒に一皿の菜を注文して飲みながら、それともなく女の一件を尋ねた、
居酒屋亭主は妙な事を聞くものだと思つて、
「亭御出家様どうも可哀想でございますよ、彼の家の主人といふのはツイ二三日前迄は達者でをりましたが、思ひ掛けない災難にかつて、頓

死じやらをして仕舞つたのでございます。」「ホオ、それは氣の毒ぢやの、内儀は未だ若いな、亭「若いも若いも、中年増ではございますが、マダ水々してゐますよ、さうして急に連合ひに別れたのですから、さんなにか悲しからうと思ふて縁のない私達でさへ涙が流れますよ……、ハイ……」一休はじつと聞いてゐたが、矢張り小首を捻りながら、

「然しさうも變ぢや、アノ泣聲は云はば造り聲で、眞から出た悲しみのこゑではない、察する處之れには何か仔細があるに相違ない、イヤ女といふものも劍呑んなものぢや……」と獨言をいふてゐると、それを聞き答めた居酒屋の亭主、

亭「エ、御出家様、泣聲を本當でないと仰しやるんですかい、シテ見ると、アノ女房が何が爲め暗い事でも、」「コレ、さう大きなこゑを出してはいけんよ何も確とした證據を認めた譯ではないが、只わしはさうも怪しいと思はれてならぬのぢや……」と云ひつゝ、勘定済まして、ゾイと表へでた、居酒屋の亭主は一休の跡を見送りながら、

亭「ハテナ、アノ御出家はさうも平常者では無いらしいが、アノお方が怪しいとおつしやるのだから、何か仔細があるのではなからうか」と思つて、來る人々にこのことを話したから、噂はそれからそれへとパツ擴まつて、果ては公儀の耳に入つた、スルト公儀の役人も捨て置かれぬ、公「それはさうも耳よりな話したデハ一つ取調べをしなければならぬ……」と早速下役人に申し付けて、それとなく探らせるに、先づ第一に分かつたのは、毎晩遅くなつてから何處からともなく一人の優男が忍びこむといふことであつた。

これを聞いた役人は、「サテコソ」と横手を打つて、即時下役をよび、
「斯うくの次第であるから、即時其の女房を引立て來い」と命じた、下役は畏まつ

て其の女の家の家へ出向いたが、女は矢張り殊勝らしく、位牌に向かつて哀れ氣に念佛を唱へてゐる、役「コリヤ、すこし尋ねる次第があるから、チヨイとお役所迄参れ、女「エツ、何の御用でございませうか、今日はなき良人の初七日でございませう、何ならあすにでも、役「黙れ、公儀の御用に忌日はないぞ、サア参れ……」

到頭役所へ引たてられた。

女は直様白洲へ引据ゑられた、役「コレ女、すこし仔細あつて取調べるから一々神妙に答へをいたせ、女「ハイ、暗い事のない身の上、なんなりともお尋ね下さいまし、役「黙れ、暗いか明かるいかは公儀で判断するのぢやが、先づ第一にその夫はなんで死んだのか、女「ハイ、それは菩提所への御届通り、早打肩でなくなりしました、役「フム成る程、シテ其方は定めし悲しく想ふであらうの女「ハ、ハイ、且那樣方の前ではございませうが、イ、生きてゐる時分の事を想ひ

出しますと、カ、悲しうて……」女は矢庭に兩袖を顔に押し當て、サメ／＼と歎歎をする、役「オ、公儀では察するぞ、シテ其方は全く一人住まひをしてゐるのか、女「ハ、ハイ、夫と別れましてからは、ホンの一人者、明けても暮れても、猫一匹訪れるものはござませぬ……」如何にも悄氣切つて云つてゐる、此の時迄優しく云つてゐた役人は、急に威丈高になつて、

黙れ女、公儀は全くの盲と思つてゐるか、それほゞ貞女を盡すものが、何んで夜ふけて男なごを引入れるのぢや、こりや隠さずに白狀いたせ……」言はれて女は、顔の色をかへ、ガタ／＼震へ出した。

女「こ、これは滅相な、今も申します通り、はかない後家の一人住まひ、何んで男なごを……」

「こりや、未だ剛情を張るか、公儀ではナヤンと種が上つて居るぞ、いよく白狀せぬとあらば、不憫なれど拷問にかけるがよいか、サアさう

「ぢや〜……」厳しく問ひつめられて、流石の女も包み切れず、終に自分の罪を白状した。

この女には實の處一人の隠し男があつた、そして良人の目を忍んでは、果敢ない逢ふ瀬を樂んで居たのであつたが、それでは思ふやうに樂むとが出来ないから、或る日二人は相談して、邪魔になるのは現在の亭主、先づ夫れから片付けろが早道であるとい決したので、亭主を殺す工夫をした、そんなときは知らぬ亭主は、或る夜快よく寢酒を飲んだ、その酒の中には毒藥が入れてあつた爲め、亭主は枕につくかつかぬに、ガツクリ落命してしまつた、女「あ、これで安心した……」姦夫姦婦は仕合せよしと打ち喜んで、それから毎夜〜忍び逢つたが、疎にして洩らさぬ天の網とは之れであつた、その罪の現はる、端緒となつたのは全く一休の活眼、イヤ活耳であつて、本當の悲しみか嘘の悲しみか、よくその

聲を聞き分けた爲めであつた。

三五 五百羅漢の名

處がこゝに或る寺で、五百羅漢を作つて堂供養をした、一山に押しよせた參詣人は法事も濟んで皆チリ〜に歸つた、中で三人の男が羅漢堂に居残つて、何かボシヤ〜囁いて退く様子も見へぬ、折柄香華を片付けに來た僧侶の一人を捉へて、▼「モシ御坊、五百羅漢とは一々名がござらう、承はりたうござる……」尋ねられたが、この坊主は三尊の外は一佛も名を知らないので、何んにも言はずに恥をかいて、方丈の方へ逃げ込んでしまつた、ところへノコ〜一休和尚が出て來た、この次第を聞くと、一「アハ……、餘計な事を尋ねるものだ、隠し藝にもならぬとぢや、そんな事を誰が覺へて居るものか、然し望みとあらば言ふて聽

かせやう」と、一休羅漢堂へ出て來ると、三人はケラケラ笑つて、◎「出家で五百羅漢の名を知らぬやうでは駄目だ、これで見ると坊主も宜い加減のものだよ」と悪口を言つてゐる。

◎「ころへ一休が出てきたから、三人の男は又一つ困らせてやらうと言ふので、互に顔見合はせながら、一休に向つて同じ問を發した、スルト一休は、「アハ……、五百羅漢の名前くらひは愚僧よく存じてゐる、一々問はつしやい、◎「ナニ、御坊は御存知か……、それではお尋ねするが、眞中なるは誰でござるか、◎「釋迦牟尼、◎「左りは、◎「迦葉……、◎「右は……、◎「阿難……、◎「それではその次は……、◎「南無さん……、◎「その次は……、◎「すきやや、◎「その次は、◎「ならんちた……、◎「問ひに應じて少しも淀みもなく、次から次と迄も、水の流れる如くスラケと答へたので、三人の男はアツと感心、

◎「御坊はなんと宜い覺へてござるな、◎「アハ……、私は幼い時から蓮華呪の一卷くらひは宙で覺へて居るのでござるわい、アハ……、◎「さては蓮華呪の文句で答へられたのかと解つてみると、自分の無學に恥て三人ども、這うくの体で逃けて歸つた。

禪師はカラケと笑つた、◎「アハ……、馬鹿な奴ぢや……、◎「笑ひながら寺を立ち出で、今しも清い川の流れのところへくると、柳の小蔭に、女が裸になつて躰を洗つてゐる、それと見ると禪師は、何思ひけん急に大地に兩膝をついて、その女の隠し處を目がけ、三度ヒヨコノノ禮拜してスタケ行き過ぎた、之を見るとき附近に居るものは、▽「ヤ、ありや何んぢや、狂がひかい、出家の癖に、女の隠し處を三度拜んで行くなんて怪しからん奴だ、◎「さうだ、大分助平の坊主だせ、一つ問ひつめてやらうか、あんな墮落坊主があるからいけないの

だ……」三四人の若い奴が、バタ／＼追つかけた。◎「ヤイ助平坊主、墮落坊主待て、手前はなんで女の大切なところを拜んだのだ、サアその譚聞かう、次第によつたら叩きのめすからさう思へ……」罵り立てる。

一休は立留まつてニツコリ笑ひながら、聲高く

女をば法のみくらといふぞ實に

釋迦も達磨もひよい／＼と生む

斯う言つて置いて、スタ／＼と行つてしまつた、若い奴等はアツと愕き、膽玉を抜かれ、その後姿を見送つてゐたが、中の一人が、▽「ヤアあれは大徳寺の一休様ぢや、◎「エツ、あれが一休様か……、それぢやア無理もない、然し甘い歌を言はしやつたものだ」と、いづれも感心して二の句がつけなかつた。

三六 五條の盆踊り

間もなく盆の十五日が来た、一片の雲もどめぬ月夜、清い月の光りが天一杯に水のやうに流れて、鷹ヶ峰一帶の景色は、美しい銀色の光りを浴びて、ポーッとして居る、これを見晴らして大徳寺の客間には、一休が三四人の客を相手に、精進料理で酒宴を張つてゐる。

賑しい話しに盃が行つたり來たりして、何れも酔ふて唄ふもの、踊るもの、面白味がダン／＼嵩じてきた、スルト一休は立あがつて、一休一流の變手古な手つき足つきして、得意の踊りを聲張り上げて唄ひながら踊り出した、

竹の切りよのたまり水、澄ます濁らず出ず入らず、人と契らば薄くちぎ
りて末までとけよ、紅葉葉をみよ薄いが散るか、濃ゆきがまづ散るもの

にて候、踊れや、人々よ、若いが再びある身かや、只何事もかに事も
若き時には誰れもかも、いたづら狂ひはあるものよ、それも苦しいもの
でおぢやらぬ、毒藥變じて薬となり候、何を嘆くぞ川端柳、水の出ば
なを嘆き候、これを嘆かば嘆かう迄よ、うら、か身にかくとにてあらば
こそ、牛は牛連馬は馬連れ、あだな浮世はごんなものぢや、唄は、唄へ
舞は、舞へ、シヤカのおか、はやすだら女く、よい人々ぢやな……

節面白可笑しく唄ふから、一同はヤンヤとぎよめいて笑ふ、スルト禪師も大分調
子に乗つてきて、「ヤアこの面白さに、一つ町へ出て踊らうではないか……」
一同は大賛成、一休は太郎次郎と言ふ下男を連れ、同勢四人思ひくりに打装つて
出かけた。

禪師の姿はとみると、布の投頭巾、紙子の袖なし羽織、腰には九寸五分の短刀
のさきに瓢箪をブラさけて、指し脇差は門前の彦三の一子お竹の菖蒲刀を兼平
ざしにさし、ぶらりくと押し出して行く。

盆踊りは五條の橋から四五丁西の廣い空地にあつた、心持のよいノンビリした
節まわしの音頭に、男女打ち交つて拍子合せて、面白さうに踊つてゐる、處が禪
師は連れにはぐれて、太郎次郎一人を連れ、酔つた足許もしぎろに、珍妙な手振
り足取りで、スットコくと踊つてゐると、不圖躓いて側に踊つてゐる白粉臭い若
い女の方へヨロくと轉んだ拍子に、ドンとぶつ附かつて、女はアレツと悲鳴
を上げて倒れる、その上へ大きな和尚の躰が倒れ、折り重なつて女は大聲あけ
る、「ヤイ墮落坊主……、女の亭主が起き上がらうとする禪師に撃つてかゝる
禪師も斯うなつては後へは引かぬ、心得たりと言ふので、大肌脱ぎになつて大手
を擴げ相手になつた、見るく二三人と仲裁人が出て来る、あちらへムラく、

こちらへムラ／＼と押して行く。

禪師は押し戻して捻合つてゐる間に、禪師の頭巾はどこかへ飛んでしまつて、紙子は引裂ける、無闇に暴てゐるのを下男は見て、下「己れッ……」之れも大肌脱ぎになつて、相手の臍と思ひ違へて、禪師の臍をグイと引いた、禪師は仰向け様になつて倒れる、腰の瓢は碎ける、**■**「ヤイ、亂暴するな……」「ドツと人が集まつて来る、禪師は起きあがり、東をさしてドン／＼逃げる、五條の橋の手前で外れた禪を踏んで、又ズツテンコロリと轉がる、之れはと起きあがり、それを締直す暇もなく、漸う命カラ／＼寺へ逃げ歸つて、**■**「ア、苦しい、一生盆踊りに出るものではない、ア、苦しい……」流石の禪師もこり／＼して、爾來盆踊りは見物にも出なかつたと言ふのである。

三七

踏臺が死んだ

或る日のと、禪師は退屈だから、大徳寺の境内をぶら／＼散歩してゐる、處へ一人の雲水が宿を求めやうと思つて、入りこんで来た、禪師を名高い一休とは知らない、破れ衣を着てゐるから、納處坊主位に思つたのであらう、ツカ／＼と進み寄つて、ヒョイヒ小腰を屈めた。

それが如何にも尊大ぶつたやうに見へたので、禪師は小癩に障つて、突然雲水に向つて、**■**「什麼……」「と不意にやられた、雲水もさるもの、**■**「説破」と叫んだ、すると禪師は言下に、**■**「隠雪根屋の簞瓢つくいは如何に」と問を發した處がこなた判らない、**■**「ウー……」「言句に詰つて唸つてゐる奴を、禪師手に何も持つて居ないから、ボカーンと拳固を振りあげて横面喰はした、こなたはア

ツと驚いて、バラ／＼逃げて行く。

その逃げる姿が可笑しいので、カラ／＼と笑つてゐる、處へ一人の役僧が出てきて、◎「禪師様、たゞいまの間答は私等にも一向了解が出来ませんが、一体あれは何んと言ふ意味でござります」眞面目に尋ねるから、禪師はニンマリ笑ひながら、「アハ……、お前方にも解らぬか、あれぢや／＼……」指さす方を見ると、雪隠の屋根に瓢箪がぶら下つてゐるばかりで、何にもない、◎「あれは禪師さま、何んで……、」
「アハ……、疎い奴ぢや、雪隠の屋根の瓢箪の数は幾つあるかと言ふとを逆様に讀んで見よ、さうなる、隠雪根屋の箆瓢つくだいとは幾つと言ふ逆讀みぢや……」
これを知ると、役僧どもはアツと驚いた、阿呆らしくもあり、◎「イヤさうも

いつに變らぬ當意即妙、恐れ入りました、
「禪家の問答はこれぢや、人のわか
つて居る事を、わからぬやうに問ふ、それを答へるやうになくは駄目である」
と懇々弟子達を戒めた。

また或る時弟子達を本堂に集めて、
「人は一念と言ふ事が大切なものぢや、
經文にも一念三千といふ、その心の持ち方によつて、佛にもなれば菩薩にもなる、人にもなれば鬼にもなるのぢや」と説教された後、
「私が偈を説くから、
皆々忘れずに覺へて居るがよい」と云つたから、弟子どもは襟を正して聽いてゐる、禪師は

地獄餓鬼畜生阿修羅佛菩薩

何にならうとまゝ、な一念
これを忘れずと置くがよい、又斯ういふ歌を云つて聞かせる」と云つて

圓くなるのも四角になるも

心 一つの置きどころ

弟子達は感心して、禪師をイヨ／＼崇拜したと云ふ事である。處がこの一休の高徳を慕つて、集まつてくる弟子がナカ／＼多い、ところがそのうちにはこの節女郎買がはやるを聞いて、一休は或る夜寺内をまわつてみると、塀を越へて出たと見へて下に一つの踏台が置いてある。「ハ、ン、之れだな」と思つて、踏台を取りのけてゐるところへ、ドヤ／＼戻つてきて、塀をのり越へるものがあるので禪師は黙つて踏台になつて居ると、先きに乗り越した一人が、
「この踏台はグラ／＼するぞ、氣をつけて來い」と云つた、それから次ぎに來た奴が、どう慌たものか、上からドツと飛び降ると、禪師シタ、カ腰骨を打たれて、ウームと前へのめつた、
「ソレ踏台が死んだぞ」と云つて、大騒ぎとなり、抱き起して見る。

と禪師だから、一同は恐れ入つて、
「眞に御師匠、相濟みませぬ……」と、平蜘蛛のやうになつて謝罪をする、禪師漸う起きあがつて、
「踏台にのる時にはよく氣をつけて參らねばいけん、飛び降るのは宜しくない」と、小言を云つて聞かせたばかり、翌朝になつても嚴重な處分もしなければ、小言一つ云はないため一同はイヨ／＼恥入つて、夜遊びに出るものがバツタリ無くなつてしまつた。

三八 乗物に足二本

越へて二月初旬の或る一日、大徳寺眞珠庵の玄關先にやつてきた、立派な武士、
「お頼み申します、
◎「ハイさなたで……、
▽「ウム、拙者は丹後宮津の城主桃井若狭介家來植村内記ともうすものでござるが、このたび主人病氣にかゝりました砌、遺言をいたされ、京都四條の邸において本葬の節は、京都八ヶ

寺の名僧をたのみ、送式をいとなみくれるやうとの申しつけ、かつ引導はせひ一
 休禪師に願ひたいと云ふ、かねて先殿の願ひでござりますから、どうか明後午刻
 より御出張を願ひたてまつります、またお出でのときは、せひ本供に願ひたく、
 此だんをどうか禪師にお取次ぎくださるやう、
 ◎「ア、さやうでござりますか、
 一寸どうかおまち下さい」と云ひ置いて、早速奥へまいり、このことを禪師に申
 しあげるに、「アハ……、本供できてくれと云ふのか……、よし／＼承知した
 しかしその供人足一人について、錢一貫宛申しうけたいが、それを承知なら行く
 と云つてみよ、◎「ハッ」取り次ぎはふた、び玄關へ出てまゐり、◎「あ、お待
 たせもうしました、さつそく承知は仕たが、しかし本供の人足一人について、
 錢一貫文宛戴きたいが、それでよろしければお出張になります、▽「ア、さ
 やうか、どうもさつそくの御承引まことに忝ない、人足のこともしかに承知

いたしたゆへ、明午刻頃までにきつと何うかおいでをねがひます」と云ひおいて
 彼の武士は歸つて行く。

するに禪師はさつそく使者を遣はして、大徳寺の領地五ヶ村の庄屋を呼び出し
 「小前の者で貧乏人なれば何人でもよいから、明朝そう／＼大徳寺へまゐるや
 う、尤もそれは女子供の差別なく、まるつたものには、錢一貫づ、遣はす」と
 云ふお言葉、そこで五ヶ村の庄屋連中は大いによろこび、
 □「ハッ、まことにあ
 りがたい仕合せ、明朝相違なく召しつれてまゐります、御免下さい」と、その
 ま、五ヶ村の庄屋は、おの／＼自分の村へかへつてまゐり、さつそく人を以て村
 々へ觸れさせたから、翌朝になると、われも／＼大徳寺へ集まつてきた女子供
 は三百五十八人と云ふ多人數だ、そこで禪師はさつそく支度を調へ、御門外へ
 出てきてみると、何しろ貧乏人の寄り集まりですから、門外はさながら館をつめ

た如く、ワーツワフと騒ぎまわつてゐる。

「サア、みんな揃つたか、揃つたら桃井の邸へ出かけるのだ、賃銭は先方でくれる」と聲をかけるに、ソラ一休さまだ、禪師さまだと云つて、大騒ぎをしてゐる、そのうち重立たるものが、禪師の前にきたつて、
「へエ、委細かしこまりました、」
「そこで、途中は何か念佛をとなへて行く事にする、その音頭は俺がとつてやるから、それに合してこい、」
「へエ、かしこまりました、」

「それからさうぢや、見たところ女や子供が澤山だ、駕を擔ぐやうなものも少いが、そのうちで丈夫さうな者をよつて、私の駕をかはるゝ擔いで行け、最も底抜けの駕で、私は中で歩いて行くゆゑ、決して重いことはない、」
「へエよろしうござります、」
「サア、よいか、駕はその門前にあるのがさうだ、こつちへ持つてまわれ、」
「へエ」と二三人して駕を門前へもち出してこると、底が

抜けてた、屋根と棒とだけの、まことに粗末なものだ、禪師も今日は本格でござりますから、紫の衣に金襴の袈裟、拂子を携へてその駕の中にはいつたが、中は底がないのだから立つて居られる。

そのうち此方は三百五十八人のうち、比較的強さうな男二人をより出して、駕を擔ぎあげ、残りの三百五十何人が前後をとりまき、大徳寺の表門前を練だした、ところが一休は駕の中で歩きながら、
「今私が音頭をとつたら、一同念佛を唱へる、ソレよいか」と聲を張りあげて、
「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」
とおほせ出されるに、オツときたと云ふので大勢が、
▽「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」
と、何しろ三百五十餘人の人が、一度にさなり出したのだから大徳寺から四條の通行路の人々は、なにごとが出来たのかと、用事を捨て、置いて出てみると、この異様な行列でござりますから、あきれ返つて見送つてゐる、

殊に當日は桃井の葬式をみやうと云ふので、四條通は黒山のごとき人でワーツワツと云つてゐる。

「ごころへ繰こんできたのは本願寺の蓮如上人、本國寺の妙蓮、妙顯寺の日葉、建仁寺の陀僧、東福寺の傳海など、言ふ上人達が、みな本供で綺羅を飾つてのりこんでくる、その乗物、法衣、袈裟などが日光に映じてキラ／＼と、まことに目もさむるばかりの立派でござります、それよりすこし遅れて一休の行列は、例の同勢が一層聲を張りあけて、一休の音頭について、
▽「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」ソロ／＼のりこんで来たから、見物の群集も膽を潰して、
■「オイ／＼吉兵衛さん、あんなものが繰込んできましたが、ありや一躰なんでけせうな、
▽「オー大變だす、ハ、ア、察するところ念佛講かも知れせんよ、オヤ／＼、女や子供が澤山に居るぞ、
○「オヤ、ありやなんでけすね、あの駕は……、
■「ホ

ウ、陽氣の加減で駕に足がはへましたな、
○「イヤ、ありや駕の化物でけせうイヤー三人連の化物……」なき、ワイ／＼言つて囁ながら、よく／＼みると、一休禪師が駕の中でスタ／＼歩いてゐるから、見物一同二度びつくり、開いた口が塞がらないと言ふありさま。

やがて行列は桃井の邸へのりこみ、禪師は玄關さきへお掛りになつたから、桃井の家來大勢、それとみるより立ちいで、お出迎へをする、
■「ハツ、これは／＼禪師様、御苦勞さまにぞんじます、
一「イヤ家來衆か、サアかねての約束ぢや、今日は供方一同へ一貫づ、やつて下さい、
▽「ハ、委細心得ました、いづれ後から……、
一「イヤそれはいかん、現金にやつて下さい、
▽「ハ、かしこまりました、しかし御供方は何人さまでござります、
一「そうさ、何人と言つて、こまかく調べもいたさぬが、凡そ三四百人は居るだらうナ、
▽「へエ、

「私の供ごもはなんだ、御主人桃井殿御菩提のため、こゝまで念佛を唱へながら
 らまるつた、まことに殊勝なものばかり、さうか一人も残らずやつて貰ひたい、
 ▽「承知いたしました……、エ、一休さまのお供の衆、賃金を出しますから、さ
 うかこれへ来てください」

之れを聞きつけた同勢は、◎「へエ、ありがたうぞんじます……、オイ錢をく
 ださるんだ、みんな来い」と、ワツと一時に玄關さきへ押し出したありさ
 ま、潮の寄せてくるやうなありさまで、玄關先きは上を下への大騒動ヅン
 押しあひへしあひやつて来た、その中には子供や女が大方だ、
 前はなんだ、小「へエ、私は一休さまのお供で……、
 「なにお供だ……、さう
 か、ソレ一貫あるぞ、
 「へエ、ありがたうぞんじます、
 「そこへ来たのはな
 なんだ、女「私も同様で、
 「コレ、
 そう押しちやいかん、お前もそうだな、

サア一貫づ、遣るから持つて行け、貰つたものは左へ出て、貰はないものは右
 へこい、
 「へエ、かしこまりました、へエ、さうぞ私にも、
 「コレヤ、
 貴方は今もらつたではないか、
 「イエ、まだ戴きません、
 「うそをつけ、
 「イエ本當で、
 「それでもやつた者によく似て居るぞ、
 「ア、あれは私
 の兄貴で、
 「ウムさうか、仕方がない、ソラ一貫だ」と、ズルい奴は二三度も
 往來して、そのたびくにもらつて居る。

ところが面白半分はこの行列についてきた彌次馬連も、この体を見て、◎「オ
 イ、こりや甘いぞ、俺も貰つてやれ、エ、手前にもさうか、
 「なんだ貴様
 は……、
 ◎「へエ、一休さまのお供で、
 「ウムさうか、ソラ一貫だ、
 ◎「へエ
 ありがたう……、
 ○「へエ、私にも、
 「貴様はなんだ、
 ○「私もお供で、
 ……、
 「ウソを言へ、
 ○「全く途中からお供をしてまゐりました、
 「途中か

らのお供では遣はすことはできない、向かうへ行け、〇へエ、いけませんか、
■「駄目だ、〇でも念佛は申しました」圖々しい奴があつたもので、
家來衆もあきれて居る、後で調べてみると、山のやうに積んで置いた錢が、スツ
カリなくなつて、數へて見ると六百三十八人もあつたと申します。

三九 大名と乞食

そこで禪師においては、一同に底抜け駕を持たせて引き取らせ、座敷へ通つて
一同に挨拶をすませ、イザ引導と言ふときに、禪師は傍に控へた桃井の家來を
顧みて、一「コレ、家來衆、若狭介、愛之助はいか、いたした、
■「ハッ、
今日は種々多用でござりまして、あなたに控へて居ります、一「あ、さうか、ち
よつとこ、へ呼んできなさい、私は愛之助の居るところで引導をわたすから、

■「ハッ、ありがたき仕合せ、ちよつとごうぞおまち下されまし」と立つて行く
ひき違へてさつそく愛之助、當年取つて十九歳、五六人の老臣を従へて、座敷へ
はいつてまいり、愛「ハ、ッ、今日はまことにありがたき仕合せ、厚くお禮をも
うしあけます」と挨拶をする。

老臣ども、續いてお禮をもうしあけると、一「あ、愛之助ののか、そこでよく
聞きなさい、いま引導を渡すから、南無阿彌陀佛」と言ひながら、ズーウと立つ
て、正面床の間に直してある寢棺の前に進み出で、聲高らかに一首の歌を詠まれ
た。

大名も乞食もおなじ月は月

地水火風のうつけ者め等

喝ッ、と仰せられた、そばに聞いてゐる家來どもは心のうちだ、◎「オヤ、

なんといふ引導だ、これはさうも妙な引導だ」とおぎろひてるが、その中で獨りニツコと笑をふくんで、感心せられたのは、本願寺の蓮如上人た、一人でございます。

なぜ一休がこの座敷へ若殿愛之助を呼ばれたかと申しますると、一たいこの桃井と云ふ人は、生前非常に奢り増長した人で、人間の死ぬと云ふことは、貴賤貧富の變りはない、今まで先祖からの頼み寺があるのだから、何も諸寺の僧侶をこまかくよび集めて、經をあげるのは無益なはなしで、そんなことをする必要はない、これは若狭之介が心得ちがひである、お前も以來親を見習つて、奢り増長してはならぬと云ふ、お戒めになつたのでござります、かねて一休が世人を戒めたお歌に、

引導は無事なる中に上げたまへ

末期の旅に赴かぬ内

とあるごとく、死んでしまつたものに、何を云つたつてわかるものではない、生きて居るうちに云つて聞かせるのが、これが何よりの引導で、そこでわざわざ愛之助をよんで、この歌をよまれたから、蓮如さんは早くもそれをお悟りになつたのでござります、その内引導が終ると、いよくこの邸を出棺して、金閣寺へ骨を納めると云ふことになつたから、立關先きは各宗の信徒、葬式人足、または僧侶達の供人で一杯になる、上を下への大混雜。

それに紛れて一休は早くも蓮如の駕にバツとのりこむと、お俱方も慌てるるか、そんなことは、氣もつかず、お上人の乗られたことだと好い氣になつて、そのまゝドン／＼一足さきに金閣寺へ行つてしまつた、その跡へ上人はズーウと立關へ出て、駕へ乗らうとするど、御自分がお伴れになつた伴方の姿がみへない

そこで驚いて、桃井の家來に聞くと、それでは今の混雜に紛れて、一休さまがつて行かれたのであらうと云ふこと、そこで上人も仕方がないから、桃井の駕を借り、それに乗つて金閣寺へのりこんできて見ると、玄關さきには一休ニコニコ笑ひながら待ちうけて居られる。

「イヤア、これはく蓮如さん、飛んだ粗忽をいたしました、自分の伴人は先きへかへしてしまつたのを忘れて、慌たものゆへお前さんの乗物へ乗つてきたが、さぞお困りなすつたらう、イヤどうも氣の毒だつた、それで大變心配をしてゐました」心配もないものだ、承知の上で乗つてきて、ニコニコ笑つてゐる癖にと、上人もころのの中に可笑しく思召したが、相手が一休さんだから始末にいけない、そのうち寢棺を本堂の正面にもちこみ、こゝでイヨク最後の引導と云ふことになる、このとき禪師は並び立つた僧侶達をおしわけて、スタく棺の前

に進み寄り、拂子を打ちふりながら、ジツと目を閉ぢてゐられたが、やがてバツチリ眼を開き。

極樂の西方淨土遙なり

トテも行かれぬ鞋一足

慈悲もせず惡事もなさず死ぬる身は

地藏も賞めず閻魔咎めず

とたからかに仰せられた、これは町人でも大名でも、死ねば六文錢六枚に、鞋一足としまつて、大名だからと云つても、眞逆鞋の二十足も三十足も入れるものはない、そこで死んで後はどうでもよいのだと云ふお考へでござりませう、桃井の家來はますくあきれ返つてゐる、そのうち各寺々によつて、それく讀經をいたし、型のごとく葬禮の式も行ふて、無事に一休も大徳寺へ引きあげて來られ

た、いよ／＼これより一休が諸國漫遊の奇談。

四〇 漁師の水葬

隙行く駒の足並はやく、いつしか應永二十三年、春彌よひの頃となつたが、ある日のこと、旅装束に身をかためた一人の侍眞珠庵の玄關口へ佇み、□おたのみ申す／＼、▼「ドレレ」と取次ぎはそれへ出てくる、▼「ア、拙者は伊勢國の北畠伊勢守の家來にして、野路猪惣太ともうすものでござるが、一休の御在住ならば、ちよつと御面會をもうしたくまかり越したものでござる、◎「ハアさやうか、一寸お控へください」と取次ぎはそのま、禪師のお居間へはいつてこの事をもうしあける、スルト、◎「そうか、何かしらぬがこなたへお連れもうせ、◎「ハッ」とふた、び玄關へ出てまゐり、◎「どうかこちらへお通りください

ら、▼「あ、さやうでござるか……、◎「ア、お洗足はどうか横手の井戸でなすつてください、履物はこちらから差あけます、▼「さやうか、どうもイロ／＼御厄介にあひなります」と野路と云ふ侍は足を洗ひ、さつそく案内につれて奥の間へ通る。

禪師はた、ちに御面會になつて、一應の挨拶がすむと、猪惣太、野一さて禪師へお願ひがあつてわざ／＼今日まかり出でました次第、外のことではござりませんが、實は拙者主人に伴が三人ござりましたが、そのうちの三男鶴丸ともうすもの、本年三月二十四日に病死いたしましたるごころ、主人夫婦は非常にそれを悲しみ、其もの、菩提のため、關において一ヶ寺建立いたしたいと云ふ望み、つきましては、今天下名僧の三幅對と云ふ、噂の高い本實寺の日親上人、本願寺の蓮如上人、眞珠庵の一休禪師のお三方をお迎へいたして來いと云ふ仰せで、拙者

この京都へ出たわけでござりますが、折あしく日親さまは遠方へおいでになつて
 た、いまは御不在、また蓮如さまは今病氣で、とてもおむかへ申しあげることが
 叶ひません、それゆへ何とぞあなたさま、伊勢の關の城へお出でを願ひ、どうか
 その事についてお差圖をくださいまするやう、主人並びに奥方綾糸さまの願ひ
 でござりますが、いか、でござりませうか」と云ふ事、一休これをお聴きになつ
 て、「あ、そうか、イヤ菩提心を起して一寺建立いたすと云ふは、まことに奇
 特な志し、よし／＼たしかに承知した、野「ハッ、さやうなれば御承知くださ
 いまするか、ありがたうぞんじます」

「しかし、今すぐ行く」と云ふわけにはまゐらんぞ、野「ハッ、一「どうも私の
 氣象として、行きたければ明日にも行くかわからないが、しかし行く氣が出なけ
 れば一生でもゆかない、野「へエ……、あ、さやうで、どうかなるべく御都合を

あそばして、一日もはやくお越しをお待ちもうして居ります、一「あ、よし／＼、
 承知した、野「では何分どうぞよろしく願ひもうします、それでは御免を蒙り
 ます」と、暇を告げてかへつて行く。

ところへ入りちがひに這つてきたのは、例の蝮川新左衛門だ、蝮「エ、和尚さ
 ま、大層よいお天氣でござります、一「オ、新左か、丁度茶を入れたところだ、
 一つどうだな、蝮「ハイ戴きます、さきにた、いま私が這つてくるときに、立

派な武士が御門を出しましたが、あれは一躰何んでござります、一「ウムあれか、
 あれは實はかう／＼かよう／＼、私にその伊勢の關まできてくれと云ふのだ、

新「ハ、アそうでござりますか、してお出でになるおつもりで、一「ウム、行く
 つもりぢやが、どうぢや新左衛門、お前一緒に行くきはないか、新「へエ、そり
 やお伴をいたしますが、しかし直お歸りになりますか、一「イヤ、すぐはかへら

ぬ、序に伊勢まゐりをしてな、それから白子の観音へまゐり、東海道の追分に
 出て、宮の七里の渡で尾張へはいつて、あれから名古屋を見物して三州へ出で、
 八ッ橋の跡を見物し、それから鎌倉へくだつて、甲州街道から身延山を見物、信
 濃の善光寺へも行き、松本から飛驒の高山を越へて、あれから越前の永平寺への
 りこみ、當時天下に名のたかい禪教と一問答して、それから越後の七不思議を見
 物して、そうしてズーウと京都へ歸つてこやうと云ふ考へだ、新「へエー」と
 新左衛門も驚いた。

なか／＼長道中で、ごりや大變だと思つたが、自分も今はこれと云ふ用事はな
 し、かねて一度はいつて見たいと思つたところばかりでござりますから、新「ハ
 ツ、委細かしこまりました、お伴をいたします、」「ウム行くか、それでは私も
 支度をするから、お前も支度に取りかゝるがよからう」と、これより兩人はその

支度にどりかゝりましたが、兎角する内にはやくも應永三年四月となり、支度が
 できあがりしましたから、そこで禪師は新左衛門をともに連れ、兩人づれで京都を
 御出立となつたのでござります。

最も禪師のことだから、扮装もあつたものではない、木綿鼠色の衣類に墨染
 の衣、それさへいくきも洗濯をしたのだから、ハヤ色もさめかゝつてゐる、餘り
 のことに新左衛門、新「禪師、あまり酷いぢやござりませんか、」「何……、

新「何がつてあなた、京都大徳寺の一休禪師と云つて、わざ／＼伊勢國邊りから
 おむかへに来るくらひであるのに、洗ひ晒の衣に、洗ひ晒の衣類で……、

「なに構はん／＼、

一休も破れ衣をきる時は

乞食坊主と人は云ふなり

蒔繪の重箱に馬の糞を入れたのより、器物がよごれてさへ居らねば、中のうまい方が大分よいと、そのまゝ、京都を發足いたされたが、新左衛門は武士のことでござりますから、兩刀を帶して立派な扮装、ごちらが伴だかわからないくらひ、どころが間もなく江州へ出てまゐり、近江八景のうちにかぞへらるゝ、堅田へ出てこられたが、別に茶店へ休まうともなされず、あり合した石に腰をかけて、新左衛門を相手に、いろく話しをしてゐられる。

「どうだ新左、これが名高い浮見堂で、江州觀音寺の觀音、西國二十三番の札所だけれども、いまは落雁はなし、比良の暮雪と云ふときでもないから、近江八景もみるよきが悪いな、新へエ、さやうでござりますな」と話してゐる、そこへ通りか、つた漁師体の者二三人、いま禪師と新左衛門の姿を、ジロく眺めて、なにかヒソく相談をして居るさまであつたが、やがて三人うちそろつて、

禪師の前に出てまいり、
 「エ、そこにいらつしやる御出家、少々お願ひがござります、」
 「ウム、なんだナ、」
 「わ、私どもはこの村の漁師でござりますが、おなじ仲間で留五郎と云ふものが、昨日なくなりました、そこで村方のものがよつて、菩提寺へ埋めてやらうとしますと、その寺では十五兩の金がなければ埋めることはできないと云はれます、ところがこの留五郎と云ふのは、まことに貧乏でござりまして、それだけの用意がありません、私ども近所の上しみで、その女房にも相談のうへ、なんとか金のかゝらないよう葬式をしたいと云ふのでござりますが、あなたさまはお見うけもうすところ、御出家さまのようで、どうか功德と思召して、引導をわたしてはくださりますまいか、偏にお願ひも致します」

「あ、そうか、イヤ承知した、案内をしなさい、引導をわたしてやらう、」

□「へね、それでは一緒に行つて引導をわたして下さりまするか、」
 「ウム、今行つてやる、」
 □「ありがとうございます、どうかマーよろしくお願いもうしま
 す」と。

そこで禪師新左衛門は、三人についてやつてくると、傍に藁屋がある、軒傾
 き、柱朽ちて、今にも倒れかゝらうと云ふ、あやしき古家、
 □「へね御出家さ
 ま、これが留五郎の宅でござります、」
 「ウム、そうか、」
 □「どうぞおはいりく
 だされませ……、あのおさきさん、私等三人で、途でこの坊さんにあふたから、
 かようくとお願ひをした、ところがさつそく聴いてくだされたので、お連れも
 うしてきたのだ、お禮をもうしあけな」
 云ふと女房は大ひにうち悦び、女「あ、
 左様でござりますか……、どうも御出家さま、ありがとうございます、サ、どう
 ぞこちらへお這りあそばして、」
 「ウム……、サア新左這れ、あ、お前が女

房か、實は私はいま腹が大層すいてゐるから、飯を食はしてもらひたいナ、

女「さうでござりますか、それでは何もござりませんが、どうか遠慮なくおあが
 りください」と、さつそく膳を持ちだす、禪師は何んの遠慮もなく、汚い膳のう
 へで、粗末な茶碗に飯をもり、茶漬にしてサラ／＼とたべてゐられるから、新左
 衛門も餘りのことに愕いてゐる。

スル内御飯もお済みになると、禪師はズーツと留五郎の死骸の側に寄つてまゐ
 り、
 「サア／＼みな衆、これへ来てやんなさい……、一つ私が引導をわたし
 てやらう、」
 女「へね、ありがとうございます、南無阿彌陀佛、」
 「どうも貴
 様のところの菩提寺の坊主は、飛んだこゝろに違ひの奴だ、金がなければ引導を
 渡してやらないなんて、シカシ今の坊主は多くさう云ふ奴ばかりだ、」
 女「あの御
 出家さま、なんでござりますか、これは火葬にいたしますか、又土葬にいたしま

すか、
「ウーム、それよりは水葬がよからう、女へね、水葬ともうしますと

一「この死骸を船へ乗せて湖水へ出し、湖へ沈めてしまふ、これが一番だ、

女「オヤ、そうでござりますか、一「それがモウ一番手輕だ、決して心配いたさ

んがよい、女「へね」と女房も、水葬と云ふのはあまり聞かないことだから、妙

に思つて近所のものに相談をする、近所のものも火葬にしても土葬にしても、い

づれ金のいる話しだからと云ふので、
「それでは、御出家さまの言はつしやる

通り、水葬にしたほうが一番薩張りしてよからう」と言ふことになつたから、そ

こで女房もそれと思案をさだめ、

女「ではどうかさう言ふことにお願ひもうします」と、これからさつそく漁師と

もは、船の支度をいたし、死骸を船に積み、禪師新左衛門の兩人も、その舟への

り込み、四五人の男は堅田の岸から舟をこぎ出したのでござります、そこで二三

丁ばかり沖合へ出てまゐりますと、禪師は、
「あ、もうよからうこ、等で舟

をどめてくれ、
「へね、かしこまりました、一「そこでこの棺の蓋を外して、

船端まで持ち出してくれ、
「へね、かしこまりました」と舟をどめて棺桶の蓋

をとり、蓋をはずしたま、舷へもち出すと、禪師はその棺の側へ寄つてまゐり

死骸にむかつて何か頻りに唱へてお出であそばす。

新左衛門その他のものは、どうなさるかを見て居る内に、禪師は大音をあげ、

一「如何に湖底の魚くずとも能つく聞け、當堅田の浦の漁夫留五郎、息ある内は

汝等の友を漁り、それによつて妻子を養ひ、露命を繋ぐ、然るに昨日命數盡き

てあひ果てたり、よつてた、いまその死骸を當海底に沈む、汝等が仲間の敵討

として、この死体を喰ふべし、これ即ち喰つたり喰はれたり、まことの佛道は畢

竟これなり、

てうさいの瓜やなすびを其まゝに

手向けになせや淀川の水

喝ッ」と言ひ終つて、その死体を棺のまゝで、ドブーンと水の中へなげこんだ、
外のものは之れを見て、今更のごとくに愕いて居る、留五郎の女房は、この様子
を見て、なんとなく悲しくなつて来たと思へ、女「ウワー……」とばかり泣き沈
む、
「サアこれでよい、留五郎は極樂往生をした、サア歸らう」と舟
を岸邊へ戻してくる。

ところへ通りかゝつたのは、圓満院の華榮和尚と言ふ人だ、今舟からおあがり
になる出家をみると、かねて都でお目にかゝつたことのある、大徳寺の一休禪
師でござりますから、大いに愕きながら、それへバラ／＼と駈寄り、圓「オ、
これはどうも大禪師さまでらつしやりますか、私は圓満院の華榮で……」

禪師もヒヨイとみると、かねて知己の華榮和尚でござりますから、
「オ、こ
れは華榮さん、どうぢやナ、圓「ハッ、その、ちはまことに無沙汰をいたしまし
た、シカシ禪師には、さうしてこれへお出でになられたのでござりますか、
「
ウム、實は斯やう／＼のわけで、今その留五郎の死躰を水葬に行ふたのぢや、
圓「へ、さようでござりますか……、コレ／＼お前方は、このお人を誰さまだ
と思ふ、
◎「へ、圓「此の方こそ、都紫野大徳寺の、一休大禪師とおほせら
れる、活佛活如来さまだ、女「わ、ッ、さてはかねて噂に聞きました、大徳寺
の一休さまでござりましたか、それとは知らず、飛んだ御無禮をいたしました、
圓「イヤ、お前方は實に仕合せだ、かう言ふお方へお引導を願へば、極樂往生を
いたすに相違ない、ありがたくお禮を申しあげるがよからう、
○「へ、まことに
にどうもありがたうぞんじます、南無阿彌陀佛／＼／＼」

とさながら手を合さぬばかりにしてお禮を申しあげる。

四一 天子の劍

華榮和尚をさきに返した禪師と新左衛門の兩人は、ブラ／＼堅田の驛を歩いてゐると、さうやら驛が賑しい容子だから、禪師は立ち留まつてみて居たが、

「コレ／＼馬方衆、坊様何だね、大分驛中が賑しいやうだが、なんで斯う人出があるのぢや、ナニ坊様、此の先さの海満寺と言ふお寺で、御施餓鬼があるので、皆お参りに行くのですよ、一あ、施餓鬼か、イヤ大きに御苦勞……、コレ新左／＼、さうぢやナ、一つ施餓鬼を見て行かうか、蟪師の坊、施餓鬼などは到つてつまらぬものです、およしなさいませ、一ぢや、お前は一人で圓満院へ行つてをりなさい、愚僧は一つ見物したい……」新左衛門は一足先

きに圓満院へ行く、禪師は獨りとなつて、ブラ／＼海満寺へ来てみると、矢張り禪宗とみへて、門前に戒壇石があつて、大層寺内に坊主が居る様子、經文の聲が聞へる。

門前には老若男女が大勢集まり、ワイ／＼言つてゐる、一「さうも怪しからん事ぢや、我れ／＼はお施餓鬼へお参りに来たんだ、それに門内へ入れないと言ふ法があるかい、一さうだ／＼、ヤイ／＼、早く我れ／＼を入れろい、なぜ門へ這らせないのだ」と怒鳴つてゐる、禪師此容子をみて、一「なる程立派な寺だがナゼ門内へ入れないのだらう」と思ひながら見てゐると、一人坊主が出てきた、何か書いたものを門前に貼りつける、一休讀んでみると、

「無縁のもの門内へ入るべからず」
としてある、一休之れを見ると、スタ／＼門内へ入り込まうとする、スルト一人

の坊主が押しどめて、○「何處へ行きなさる、○「本堂へ参る、○「なんで本堂へ行きなさる、○「施餓鬼の参詣に参つた、○「門内へ入つてはいけません、昨年も施餓鬼の時に、大勢門内へ這つて境内を荒し、又はお賽銭などを盗んで行つた奴がある、それがため今年は何も入れない事になつてゐる、這つてはいけません、○「之れは怪しからん事を云ふものぢや、當寺は禪宗ではないか、愚僧も禪宗ぢや、禪家の寺へ禪宗の坊主が来るに不思議はあるまい、○「たとへ同宗の者でも、之れへ貼札をしてゐる以上は、施餓鬼を受ける亡者に縁のない者は、入れる事はならん、○「それでは無縁の者は這つてはならん云ふのか、○「如何にも左様で……」

「それでは改めて尋ねるが、他人は女房にはなれないかな、○「なんといはつしやる、○「他人は女房になれないかと聴くのぢや、○「ウーム……」坊主返答

が出来ない、一休甘い事をいつたもので、無縁のものが集まらなければ、この世の中はさうする事も出来ない、況んや女房は無縁のものも来て有縁となるのだ、この坊主が返答に困つたのをみると、一休いきなり腰にさしてゐた鐵の如意を取り出し、坊主の頭をボカーンと叩いた。

問をかけて返答が出来ないときは、直に如意でぶん殴る、これは禪家の法だ、坊主はアツと驚いたが、○「恐れ入りました……」これを見てゐる大勢のものは、○「イヨー、豪い坊さんがきたぞ、何か問答をしたが、イキナリあの坊主の頭を鐵の棒でぶん殴つた、モシ坊さま、その坊主を打ち殺しておくんないですか、このお寺は御領主の御菩提所だといふので、平生こいつが威張つて仕方がござりません、序だから叩き殺してやつて下されませ、○「どうも豪い坊様ぢや、何んといふ問答をしたんだい、○「俺はよく聞いてるだが、兄弟は他人の始まりとい

ふ問答をかけたのだ、
 「ヤイ、うそをつけ、他人は女房に出来ぬかといつたのぢやわい、
 「へー、何んの事だらう……」ワイ、いつてゐるうちに、一休は、
 「それでは這るぞ、
 「勝手になさい……」一休はスタ、這つて行くこれを見た大勢は、
 「ドヤ、後、
 「コレ、這つてはいけん、静かにしろ、
 「黙れ、生ぐさ坊主め、他人は女房になれないか、さうだ返答しろ、
 恐れ入つたか、
 「鐵の棒がねねから拳固で殴るぞ……」氣の早い一人の男が、坊主の頭をポカリとやる、
 「アイタ……、
 「これは失禮な……」又一人が、
 「他人は女房になれねへか……」ポカリ、ドヤ、入り込む中には、
 「さうだ新兵衛さん、他人は女房になれねわかといふと、この門内へ入れるんだぞ、
 新ハ、
 中へはいるマジナイかな……」問答をマジナイと心得てゐる。
 打たれた坊主は奥へ逃げこみ、この事を方丈に告げると、
 流石は一ヶ寺の住職

だけに、師「その出家は只の人ではない、名ある僧に違ひない」と思つて、それへ出てきた、
 出「拙僧は當山の住職喜豊と申す、貴僧は何人におはすや、
 「これは、愚僧は都大徳寺の一休でござる、
 出「エッ、さては禪師でござるか……」
 「喜豊大地へ平伏してしまつた。
 大勢は之れをみて、
 「イヨ、あの和尚さんが又問答でやられたな、モシ坊様、
 鐵の棒でナゼ殴らねわので……」ワイ、騒いでゐる、
 「ところが誰れいふとなく、
 此人が一休禪師である」と云ふ事がしれると、
 涙を流して喜んだ、
 老若男女、
 バラ、と賽錢を投げる、
 先きに打たれた坊主が、
 「これは占めた、
 福の神が舞ひこんだ、
 有がたい」と悦んで、
 「賽錢はこれへ、
 酷い奴もあるものだ、
 一休は本堂に禮拜して、
 ズイとそこを立ち出で、
 四五丁くると若い一人の武士が、
 ブラ、やつてきて、
 「御出家、
 御身はいつれのお人でござる、

「拙僧は京都のものぢや、シテ御身は、」
 「拙者は越前のもので、武者修業者
 でござる、」
 「ハ、ア左様か、随分途中で豪傑勇士にお出會ひであらう、」
 「ナニこれ迄只の一度も出會つた事はござらん、」
 「ハ、ン、それは豪い、スルト御
 身は大分名人だな、」
 「イヤ別に名人と言ふほどの事もござらんが、世の中は廣
 いようで狭いもの、あまり名人は居ないものでござるな、」
 「シテ御身はぎんな
 のを名人と言はつしやる、」
 「左様ぢや、深夜寝てゐるところへ曲者が忍び込む
 打たんとするを取つて押へられる、これ等が天下の名人でござらう、」
 「アハ……
 そんなものは名人ではない、た、油断がないと言ふだけの事だ、何事によらず名
 人と言ふは、妙の位に到らなければ名人とは言へぬ、深夜人が忍びこみ、それに
 打たれるやうでは武士とは言へぬ、御身の言ふところの名人は、油断のない武士
 と言ふまでぢや」

「私は禪家の坊主ぢやが、禪學の悟りも武藝の悟りも、悟る道に二つはない、
 た、今が大切ぢや、御身も十分腕前を磨かつしやい、ところでモ一つ尋ねるが、
 御身は武士だが、天子の劍を修行するか、諸侯の劍を修行するか、又普通の人の
 劍を修業するか、承はりたい、」
 「ハ、ツ……」
 と言つたが、武士は返答に詰
 つた。

「一只人を斬り捨てるのみの劍なら、無益だからよしなさい、武藝には三通りあ
 る、まづ第一に天子の劍と言ふは、仁を以て身とし、儀をもつて鞘とし、諸侯を
 もつてツバとする、この劍一度抜けば、諸侯を正し天下を服す、之れ即ち天子の
 劍と言ふ、諸侯の劍は勇士をもつて鞘となし、清き士をもつてツバとなし、
 賢き士をもつて背となし、之れを抜いて眞ッ直にすれば、前に敵なく、これを振
 れば四方に敵なし、上は天に則つて日月星の三光に従ひ、下は地に則りて

春夏秋冬の四時に従ふ、中は民の意を和けて、以て領分を安んず、この劍一度用ゆれば、雷の鳴るが如く、領分のもの甲冑に身を固め、死を恐れず、何事も君命に従はざるなしぢや、又戦ひを好む普通の人間の劍は、人を斬るを以て能事となす、之れが下の下ぢや、天子諸侯の劍を活人劍と云ひ、戦ひを好む劍は之れを殺人劍と云ふ、お武家よく考へさつしやれ」と、禪師ニヤク笑つて居る武士は今までの勢ごこへやら、ハツとそれへ平伏して、

▼「ハツツ、恐れ入つたる御説法、心根に徹し有がたく拜聴いたしました、就ては御坊は何人にて候ふや、御姓名を承はりたい」

一「ナニ、私は名乗るほどのものではないが、都紫野大徳寺の一休ぢや……、

▼「エツ、さては天下御高名なる一休大禪師でござるか、眞に失禮仕りました、拙者は越前のもので、瓜生源六郎と申すもの、何とぞ此上は禪師の高徳によ

つて、禪學の悟道を得たく存じまする、一「ウム、禪學は一朝一夕で學べるものでない、今は旅のことゆへ、追つて歸つた節參らつしやい、さらばでござる」

禪師はノコノコ圓満院へ戻つてくる。

四二 山伏問答

そこでその夜は華榮和尚の取りなしにより、圓満院へ一泊をいたされ、その翌朝別れを告げて立出で、今日は三井寺から唐崎の松を見物しやうといふので、繼ぎの濱へお越しになり、大津の石場から渡が出来ますから、兩人はこの石場で舟の出るのを待たうと、兎ある掛茶屋に腰をおろして、一服してゐられると、間もなく、

○「オーイ、舟が出るぞー」と客をよぶ。

こゝは矢走の舟と云つて、

武士の矢走の渡し早くとも

急がば廻れ瀬田の唐橋

と古歌に戒めてあるごとく、よくこの邊は叡山おろしと云ふ烈しい風があつて、と大きく渡舟が流されることがある、もつともこの叡山おろしの憂ひさへなくば、この船わたりをするに、大分近路だから、天氣の好い日はみなこの舟へのるのでござります、そこで一休は新左衛門を連れて、この渡舟へのりこんだ、スルト船頭は、▽「オイ／＼坊さん／＼、」「なんぢやナ、私かい、」▽「私しかいぢやねわ、そうお前のように遠慮もせずお客さまの前へ行つちやいけねわやナ、ひつこんで居ねわ、」「あ、そうか、それは大きに悪かつた、ヨシ／＼こつちへ引きさがらう……、あ、新左、お前へこつちへ來なさい、あまり遠いと話しが見へないから」

新左衛門も船頭に、此方が一休さまだと云ふことも云へず、船頭なごも云ふものは、口汚くて困ると想ひながら、禪師について側へ寄ると、そこに丁度乗合したのが山伏、その向ふに神主、その外十七八人ののり合で、みなジロ／＼二人のやうすを眺めてゐる。

スルト禪師は、「コレ／＼新左、なんともよい景色ではないか、わけて今日は幸ひに風はなし、さうもよい心持ちだナ、蛇へエ、左様でござります、イヤなる程よい景色で……」新左衛門は、た、ハイ／＼と返事をしてゐる、スルトこなたに控へた一人の神主は、乞食坊主のやうな奴が、風體立派な武士に話しをしかけてゐるが、侍はおとなしいから、返事に困つてゐるのだナと、妙なところを氣をまわして、○「オイコラ坊主、オイ／＼坊主」としきりに呼び立てたから一休はハツと氣が付き、「ウム、なんだ、」○「ウムなんだではない、よく貴様

は喋るナ、口から税が出ないからつて、よい加減にしろ、汝が延べつ幕なしに喋るので、やかましくつてたまらず、全体貴様は此の日本と云ふ神國に生れ、坊主になるなき、云ふは心得ちがひの奴だ、以來還俗をなし、眞の人となれば、さつきからあの兩刀を帶したお方が、迷惑がつてゐるのが目につかんが、それが汝にはわからんのか、大小刀を帶したお人は、四民の上立つ侍と云つて、汝のような乞食坊主とは身分がちがふぞ、汝なんぞは世捨人と云つて、世はすてねども世にすてられた瘦坊主、あまりベラ／＼油紙に火のついたように喋るものではない、おとなしく引つこんで居ろ」と怒鳴りつける、一休さん心のうちには、「オヤ／＼酷いことを云ふ奴だ」とは想つたが、こんな奴に對手になつてはつまらないと、「イヤ、どうも恐れ入りました、以來はきつと喋りますまゝさ、」

「ウム、かならず喋るなこの狸坊主めッ」

と口汚く罵つてゐる、スルトこなたに居りました山伏は、餘りの事に癪に障つたどみへてジリ、と神主の方へむき直り、山「こりや待て神主く、」

「なんだと狸坊主とは怪しからんではないか、乗台一同がた、顔ばかり見あはせて黙つてゐては退屈だから、おの／＼すきな話をして居るのだ、何もお前に話をしかけなかつたら、喧しいもそう／＼しいもあるまい、よけいな答め立てをするない、古い歌にも

神の戸を開いてみれば幣許り

参る心に神ぞまします

で、神と云ふものはあるものではない、正直の頭に神宿る

正直の人の頭のなかりせば

影多の神の宿無しもあり

汝は入らざる咎め立てをして、狸坊主なんて憎まれ口を利くと、はたで聞いてゐてもまことに聞き苦しくつていかん、私は鎌倉不動院の門下で、大日坊仙橋ともうすものだ、見うけるところその方は神主のやうだが全体この神主だ、間違なくすると不動の金縛りで、珠數繫ぎにするからさう想へッ、
 「ナニ、いはして置けば不埒至極、私は近江國一の宮で、この舟が向ふへ着けばわが家も同然だ、その一の宮の建部大明神を守護する、御朱印千百石を賜はる神主官幣大神の今宮内記ともうすものだ、不埒な山伏、かれこれ申すにおいては、その分に捨ておかんぞ、入らざるどころへ口出しをして、問答をいたすといふなら問答をしてやる、腕力ならば腕力で勝負を決してやる、サアさうだ」と今にも掴み掛らうといふ有様。

スルト一休、これを聞いて、「ハ……イヤこれは面白いナ、行れ〜きつち

も負けてはならんぞ、山伏負るな、神主も負るな、ハツケヨイ〜、やれ〜」
 せはやし立てる、他の乗合はこれを見てあきれ返り「モシ〜御出家、戯談夢やないよ、お前さんの事から起つた喧嘩だ、それをケシかけちやいけない、一
 「ア、さうだつたナ、〇さうだつたもないもんだ……ア、もし〜お二人さん御同様に斯うして一つ舟に乗りあふといふのも、これも何かの縁だらう袖摺り合ふも他生の縁、躓く石も縁の端、詰らないことで目角を立て、争ふ事はないよ
 お互にニツコリ笑つて勘弁なさいナ、ねねそんな事でいひあつた日には際限がない、サア〜仲直りを……」とみな〜仲裁を試みたが、なか〜さうしてきつちも聞き入れれる氣あひもない。
 ますます〜猛り立つて議論に花がさく、一休は面白い〜と手をうつて悦んでゐる、今しも大日坊に罵りかへされて、猛りたつた。

四三 墨染櫻の由来

今宮内記、他の仲裁も何も耳に入らばこそ、今然らば大日坊にやらまゐれ、恐れ多くも天朝御代々の御定紋は十六葉の菊花で、替紋に櫻をお用ひになるはさういふ譯か、汝しつてゐるか、知つてゐるなら答へをしてみろ、さうだッ、大「ウム、それは……、ウム、今「サアさうだ、答へは出来まい知らなければいつて聞かす、これは筑前國背振山の頂きに、疊二疊敷ほごの自然石がある、その石には自然に十六葉の菊花をあらはし、その傍にある櫻が五色に咲いてある、ゆへにこの菊をもつて御紋とし、替紋に櫻を用ひる、花の玉と書いて櫻と読み、またその古藏人の職を勤めた峰の宗貞は、朝廷へ忠義を盡したものであつたが、後に隱世をして僧正遍照といはれたが、非常に和歌が上手で、一日朝

廷へ召されてそのお別れを告げるときに

深草の野邊の櫻に心あらば

この春ばかり墨染に咲け

といふ一首の歌を詠んだ、然るに不思議やその年は櫻の花が墨のごとくに咲いたといふそこで、深草の地を俗に墨染といふのだが、これ皆歌の徳で、和歌は神道に限つたものだ、さうだ歌は神國の寶といふが、汝にはそんなことはわかるまい、大「ウム、ウム、ウム、今「さうだ、そんなことで議論も何もあるものか、馬鹿めッ」といはれて大日も言句に詰り眞ッ赤な顔をして續く言葉もないうやうすでござりますから、此とき一休は傍より、「コレ、貴様はなかく理屈をいふが、そんなことは佛法にもあるぞ、吉備大臣入唐して歸朝のみぎり唐土よりわが日の本に魔王が渡つてきて、疱瘡をはやらせたそのときに、今

汝がいつた筑前國背振山の石を、三の關に曳き來りしは有名なる行基菩薩である、菩薩はまたその櫻をとつて藥師を刻、右の石の上に安置して瘡癩の退散を祈念した、スルト不思議やその流行病が一遍にやんだ、その藥師を今俗に石藥師といふのだ、また西國二十七番の札所、播磨國書寫山圓教寺の本尊は櫻だ大地よりはへたなりに、觀世音を刻その枝に四天王をきざむ、その細工人は即ち正空上人、かういふことがあるが、さうだお前は知るまい、さうだ外記とは外を記すのだが、その方は内記ともうす名だから、日本の國のことをしらないではすむまい、また伊勢の白子に小野道風といふ人があつたが、その娘に命比賣といふのがあつて、そのものは非常に觀世音を信仰してゐたが、あるとき、天照宮へ女人成佛が出来るかできないか、奇瑞をあらはしたまへと祈つたときにその方が信仰する觀音の境内に櫻の花が咲いたときには、女人成佛が出来ること心得

よといふ御神托、スルトその年初めて白子の觀音に櫻がさいた、そこで命比賣はその奇瑞に驚いたといふが、今にいたつても雪の中にさいて、これを不斷櫻といふ、そのときに命比賣の歌として、

誓ひあるいつも櫻の花なれや

見る人さへも常磐なるらむ

この歌が残つてゐる、さうぢやさうして見ると神佛にも違ひはなからう、斯ういふことがあるが、さうぢや、内記答へがあるか。

今「ウム……ウムそれは……」と一休が立てつけに仰せられると流石の神主も恐れ入つてなんとも返事が出来なくなつてしまつたから、眞ッ赤な顔をして俯向きこんだ、スルト山伏は大ひに悦んで、大「イヤさうも感心だ、お前さんは大層色々なことを知つて居らつしやる、さうぢや神主、佛道の宏大なものにはお

それ入つたらう、この上は山伏が法力をもつて、この場へ不動明王をあらはして見せる、汝も一緒に拜むがよい」と早その支度に取りか、つた容子、これを聞いてゐる乗合の人々は「オヤ、どうも大變な事になつてきたぞ、あの山伏が不動さまをこゝへ現はすといつたが、そんなことが出来ませうか、」
 「へエー、サア、どういふものでけすか、マア、見てをりませう」とワイ、いつて眺めてゐる、そのうちに仙橋は、湖水の水をもつて手を洗ひ口をす、ぎ、身支度を調べ、そのところへ突立ちあがり、念珠を振つてサラ、と押しもみながら、大きな聲で拜みはじめた、大「東方には剛三世夜叉明王、西方には大威徳夜叉明王、南方には軍陀利夜叉明王、北方には金剛夜叉明王、中央には大日大悲不動明王」と祈り出した。

禪師は手を打つて笑ひながら、「ハ、ハ、ハ、ウレレレガンのドウ畜生……ウ

ンデレガンのドウ畜生」と頻りに混ぜ返して居らつしやるから新左衛門は心のうちに、
 蛇「何しろ厄介なことが出来たもんぢや」とヒヤ、と想つて困つてゐられる、その間にも山伏は一生懸命目を閉ぢたま、油汗をタラ、流して居るうちに、
 這はソモいかに這はいかに、不思議やその邊り一面薄暗くなつたかと思ふに、
 現はれた不動明王の佛体、背には炎々たる火炎を負ひ、左の手には捕縄をもち、右の手には降魔の利剣をひつさけ、顔色は藍色にして、
 嚴然と突立たその左右にはお前立として制陀迦童子、
 困迦羅童子、みなあり、と現はれたこれを眺めて乗合の人々はアツとばかりにうち驚き、
 「アツ、どうも大變な法力じゃないか、あり難や不動明王、」
 「ア、ありがたい、南無大日大威徳不動明王さま、
 囊漢三満陀ア、」
 中には夢中になつて賽錢を投げて居るものもある。

たゞそのなかに禪師はたゞ一人、「アハ、ハ、ハ、ハ」と高笑ひをなされる、例の山伏はうしろをふり返りながら、怒りの聲をはりあげ、山坊主、汝なにを笑つてゐるのだ、失禮千萬、なにがをかしくつて笑つたのだ、「オヤ、おかしから笑つたのがさうした、山「イヤこれは不届きのやつ、何がおかしい」ところんきは神主をやめて、禪師に食つてかゝつた。

乗合の人々は、甲「ソレまた始めやアがつた、こんきは同志打ちだ、「乙味方の喧嘩だ、面白い」」とはやし立て、「コレ山伏、きさまは神主とあらそつていひ負かされたのをこの私が勝つてやつたのだ、がお前は頼みもしないのに己れにほこつてなにも不動尊を引合ひにだすにもおとよばないではないか、察するところ貴様は山師だナ、そんなことぐらゐでは決して驚かんぞ、山「ナニ山師だ、……不らちなことをいふやつだ、山師とはなにをいふのだ、口の横にさけたまゝ、

にすて置き難き言葉を放すやつだ、汝はさやうなことをまをすなら、經文でこの不動尊を消すことができるかさうだ、「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、馬鹿をいへ尊ひ經文なきを讀みあげなくとも、私が小便をすればこの不動は消へてしまふ、山「なに、消すものにことをかいで小便で消すとは、イヤさうも不届き千萬なことをまをすやつだ、さういふならば、速かにこれを消して見ろ、「ウム、そりまでにいふなら、わしが小便でけして遣るから、かならず驚くな」禪師はズイツと立あがり、スタ／＼と二足三足お進みになり、船の向ふに現はれた不動明王の前にたち、なにか口に呪文を稱へながら、前をまくつてヂヤア／＼小便をやりはじめた。

スルト、こはいかにいま、で嚴然と立た不動明王の姿は、バツと掻き消すごとくに消へて、跡には只湖水の漣がサラツ／＼と船に當つて居るばかり、乗合

ひの一同はアツとばかりに二度びつくり、聲を出すものもないくらひ、このとき禪師は、「どうだ山師、おそれ入つたか、山「ウームツ」どうつむき込んで居る、このとき乗合の人々は大いにかんしんをした、甲「どうだい、不思議なことがあるものだ、いつた通りあの坊主の小便で不動さまが消へてしまつたさうも今日は不思議な船へ乗りあはしてまことに面白い、それにしてもあの山伏はモウ恐れいつたのか知ら、グーツと詰つてしまつた」さみな山伏の顔ばかりを見詰て居る、大日坊はまつかになつて怒つたが、目の前で小便でけされたのだから、なんともしかたがない、山「坊主、貴様は一體何宗だ、」「ウム、私しか、私は八宗兼學だ」。

山「それがなんで俺が折角祈り出した不動明王を消してしまつたのだ、」「それは、お前が消せといつたからけした、だがどうしたナ、誰れもたのみもしないの

になにもお姿を、へあらはすことはいじやあないか、た、お前が、慰みに祈り出した不動明王なら、また私が慰みにけしもししたのじやから、別に不思議なところはな、不動明王とは讀んで字の如く、動かす明らかなので、これは所謂人間の精神を祭つたものだ、背なの火炎は人間のこゝろの燃へぬやう、また手に持つ繩は悪魔を退治、降魔の利剣は魔物をおろす、悪心をけし、悪念を亡ぼすかたちだ、それをしらすしお前は慰みとするなら、私がけしてしまつたのぢや以來か、るこゝろわちがひをするな、山「ウム……、しからは坊主、汝それほどに豪いものなら問答をいたすが、美事それに答へをいたすか、」「ウツフ、面白い、なんでも持つてこい、お前のいふくらひなことは、答への出来ない私ではない。

山「よし、しからはわが日の本にあつても唐崎とは如何に、」「ハ、ハ、ハ、ハ、

るで、子供のいひそいな問答ぢやナ、お前のご事ならそんなものだらう、しかし所柄だけに近江八景で来ただけかんしんだから、答へてやる、日本で出来ても傘といふがごとし、さうだ、山「ウム、然らば土で出来たるを石山とは如何に」
 「しづかに行くも、矢走といふがごとし、大「ウム、この坊主め、なかく口のへらん奴だ、然らば汝はこの船をとめることができるか、さうぢや、」
 「ウム、お前にやれるか、大「如何にも、それぐらひのことはなんでもない、いまにぞめて見るから驚くな」と大日坊は、再び船中に立上つて、念珠サラ／＼と押もみながら、又もや東方になにといふやつでいのり始めた。

四四

法力競べ

これをながめて乗合ひのものは、驚ろくまいご事か、ほかのご事ならなんでも

まいが、船を止められてはこちらがこまるぞ、ワイ／＼いつている、こなたは大日坊一生懸命にいのつてゐるけれども、船はちつとも止まりません、相變らず追つ手をうけて、さながら油のうへをゆくごとく、フーツと満帆に風をふくんで走つて居る。

スルと禪師は、「オヤ／＼、山師、さうしたぢや、船は相變らずとまらんではないか、そんないのりやうでは駄目だ／＼、いまにわしが止めて見せるぞ」といはれて、山伏もしかたなく、跡へ下つて祈念をやめてしまった、大「エ、ツ、さうもしかたがない、貴様のやうなやつが居るから、わが法力も利かないのだ、しかし坊主、それでは、貴様がこの船をぞめて見ろ、」
 「ウム承知した、まあ待て／＼、さう急ぐな、大「サア早くやれ、」
 「静かにせい、いまにぞめて見せる」
 急／＼いつて居るその内に、はやくも船は順風でさう／＼草津の宿へついた

乗場へ横さまにヒタリと船が着くと、船頭が、船「サア〜みなさん、草津へ着きましたよ、上がつてくださいい〜、」
 「ホーラどうぢや山伏、とまつたらう、大「なに……、」
 「なにといつたつて、船がとまつたであらうがナ、大「これあ
 とまるのが當り前だ、こゝは草津ぢやないか、」
 「當り前でも草津でも、とまつたことは確にとまつたらう、いくら貴様が法力でとめやうとしても、走つて居る船が止まるものか、私は止めるやうにして止める、なんど乗合ひの衆、おそれ入つたたかな」
 いはれて乗合ひの人々も、皆「づうづうしい坊主だ、これなら誰れだつてできる」
 とみなく、大笑ひをして、ゾロ〜陸へあがる、禪師も、
 「サア新左、あがらうぢやないか、新「ハイお供いたしませう、しかし私のどうなることかと心配をして居りました。」
 「なあに、あれぐらひなことはなんでもないよ、新「しかし禪師、あの山伏が

不動明王の姿を現はしたのは、どういふ譯でございませうか、
 「ウム、ありあなんでもない、修験者といふものは、ヤレ不動の金縛りだとか、火渡りだとか、または空中にあるもの、姿を祈り出すとか、種々な妙なことをするものだが、あれはみな只人の目を眩ますだけで、こちらがなんとも思つていなければ、すぐその種はあがるものだ、だから私は小便でけしたのぢや、新「へエ、さやうでございませうか、イヤしかし無事にすんでよろしうございました」
 「一休禪師と蜷川新左衛門は、いま船をあがつて向かふへ行きかける、スルどうしろのほうより男「エ、それへお出でなさいませうのは大徳寺の禪師ぢやございませうか」といはれて禪師はヒョイツどうしろをふり返り。
 「オ、錢屋、お前どこへ行く、久「へい……これはは蜷川さま、新「ウム、久平か、どこへ行くのだ、久「どうも珍らしいところでお目にかゝります、私は

先月東の方へまゐりまして、いま戻り道でございます。「ウム、そうか、道理でこの頃大徳寺へもみへないと思つて居た、また商賣用かな、久「へい、さやうで、しかし禪師はごこへお越になります、」「ウム私が、私は足の向いたほうへ、久「これはどうもおそれ入りました、それでは私はこれで御免をかうむります、」「ウム、新「さらば……」と兩人は錢屋に別れて、スタく向かふへ行きかける。

スルとかの船中で不動明王をいのりあらはした山伏の大日坊は、禪師に續いて陸へあがり、聞くともなしに、いま錢屋といふ人のはなしを聞く、チラリと禪師といふのが耳へはいつた、こころのうちに大日坊は驚ろきながら、大「オヤくサア大變だ、これはなんでも大分身分の重い人にちがひない、ことにあの立派な武士は僧侶のお供らしい、こりアどうもおそろいた」と思ひましたから、同

じくスタく後について、そつと鯉川新左衛門の袂を控へ、小聲になつて大「エ、モシくちよつと伺ひますが……、新「ウム、山伏か、なんだナ、大「ま、失禮ながら私がいまあなたのおはなしを聞いて居りますると、禪師くといふお言葉が聞へましたが、あの坊さんは一體ごなたでございます、新「ウムあの方か、あれは京都紫野大徳寺の一休大禪師だ、大「へッ……さやうでございましてか、知らぬこと、はまをしながら、飛んだ失禮をまをしあげました、どうか御勘辨を……、」「イヤどうぢや、大日坊、大「へい、これは一休大禪師、大變失禮をいたしましたがお許しくださいまするやう、」「イヤかまはぬく、旅の恥はなんどかで、勘辨もなにもない、がしかしお前はごこへゆくぢや、大「ハイ、エ、私はこれから伊勢地へまいりますもので……、」「オ、そうか、

私もあちらへゆくのだ、どうだ一緒に行かうか、大「ハイ、さやうならばお供をいたします」とこれから禪師は蜷川新左衛門、大日坊仙橋の二人を連れて、だん／＼やつてきたのが草津の宿本陣、近江屋佐七の宅だ、新左衛門はさきにたつてズーツとなかにはいつてまいり、新「ア、許せよ、亭「ハイお出でなさいまし、お早いお着きで……、新「ア、三人連れであるが、今日は其方宅で厄介になりたい、最も一人は宿錢などは別だ、亭「ハイ、ありがたくぞんじます……、コレ／＼お竹、お三人さまだからおすゝぎを持つてきな、女「ハイかしこまりました」と女はそれへ盥に湯を入れて持つて来る、禪師はさきにあがり端へ腰をかけ、足を投げ出したまゝで、大「ア、つかれた……、コレ／＼仙橋、大「ハツ、大「どうか草鞋をぬがしてくれ、大「ハツ……、大「それから、足を洗つてくれ、大「ハツ……」とそこで禪師は足を洗はして女中に案内されて一間へとほる。

續いて蜷川新左衛門、大日坊仙橋もそこへ通つてくる、このとき大日坊はこゝろのうち、大「何ほ一休禪師だつて、人を奴僕のようにこきつかふのはあまりだなにか一番この返報をしてやらう」とかかんがへて居る、そのうち禪師、蜷川新左衛門の二人は女中のしらせによつて、風呂に立たれる、この間に仙橋は、なにかかんがへたと見へて、そつとこの近江屋の亭主を呼び、仙「さて亭主、いま私等がお供をして居るあのお方は、いま京都で名代のお能の名人だ、だから私からも頼んでやるが、一つ能を願つて拜見しろ、あんなお方の能を見るのは少々のはづれではできないことだ」といはれてこの亭主も、豫てすきな道であつたと見へて、佐「へエ、さやうでございませうが、そういふことなら、ぜひ拜見をしたいもので、どうかあなたからもよろしくお願ひまをしてください。

仙「ア、よいとも、しかし能舞臺があるかナ、 佐「へエ別に能舞臺といつては
 ございませんが、この下の坐敷は襖をとりまますと、疊敷が三十何疊しけます、
 そこを舞臺といふことにして、中庭を見物の場所になれば、百人や百五十人の見
 物は譯なしです、 仙「ウムそうか、それはよい都合、今風呂から上がつてこれ
 たらさつそくお願ひまをして見ろ、 佐「へエ、畏ました、 仙「しかしこのこと
 を俺がいつたといふてはいかんぞ、 佐「へい、承知いたしました」となほもしゆ
 くどうちあはせをして、そのまゝ、亭主は下へおり、何食はぬ顔をして禪師の湯
 から上がつてこられるのを相待つて居る。

スル内禪師は新左衛門を連れて湯殿をたちいで、いま二階へ上がらうとなされ
 る時に、こゝぞと思つた亭主の佐七、 佐「エ、御出家様、ちよつとどうぞおま
 ち下さいまし、 一「ア、なんだナ、 佐「承はりますればあなた様は、大層お能

がお上手だといふこと、 私もかね／＼ 都にはあなた様がお居でになるといふ
 噂を聞いて、一度はぜひ拜見をしたいと思つて居りましたが、今日はさいはひ
 私方へお泊り下された記念として、お能を拜見したいのでございませうが、
 いかゞでございませう」禪師も蜷川も意外な言葉に驚きましたが、流石は禪師、
 早くも仙橋の悪だくみといふことを知られたから、 一「ア、そうか、よし／＼み
 せてやるからしたくをするがよい、しかし能舞臺は……、 佐「へい、それはかや
 う／＼で、 一「ウムよし、それでは明日の晝ごろから始めることにするゆへ、そ
 の支度をして置くがよい、 佐「へい、どうもありがたうぞんじます」禪師はかく
 して快よくうけあはれたが、まことに禪師は能はござんじないが御覽になつた
 ことはたび／＼あるのだが、別に習つたことでないから、能舞臺なきにたつては
 薩張りものにならないのですが、例によつて禪師の頓智を發揮して、大日坊仙橋

近江屋佐七、そのほか見物のものどもを困らせるといふ、いこおもしろきお話に移るのでございます。

四五 十五日續の能

そこで本陣の近江屋佐七の發起で、さつそく下坐敷を取りかた附て、襖をあけ放すと、なるほぎ三十何疊といふ大廣間、庭の方には人を雇ふて棧敷を拵へ能舞台の用意でその日は暮れ、その翌日になると、かねてすきの道の人々をよび寄せ、大鼓、小鼓、地謠に笛方、スツカリ役割を定めて、辻々にはピラを揚げ、髪結床、または風呂屋などにも廣告を出して、今日晝から近江屋の坐敷で、京都の能役者の先生が能を見せるから誰れでもこい、もつとも見料はいらんどいふことをしらせる。

また町の内外、近郷近在へは、朝のうちから人を雇つてこのことを觸れさせたから、なんでも都の能を見物しやうといふので、ゾロ／＼と繰込んでくる。

本陣ではべつに裏口に木戸を設けて、そこから庭の棧敷へ通るやうになし、だん／＼人を入れたところが晝前になると、はや庭先きは一ぱいの人ではいれなくなつて来ると、裏口から梯をかけみな／＼屋根へ上がつて見物をするといふ、なにしろ本陣の内外は見物人が黒山のごとく、なだれを打つてワイ／＼騒いでゐる假りにこしらへた能舞臺には、はやそれ／＼太鼓、小鼓、地謠、笛方などは、京都のお能師に笑はれぬやうといふので、はやくから坐を占めて待ちかまへ、時のくるのを待つてゐる、この時本陣の主人は禪師の側にまいり、佐「エ、御出家様、モウしたくも充分にと、のひ、見物人も一ぱいになつて居りますが、何をあそばします、さうか何分お得意の物をねがひたいので……エ、高砂でございま

すか、それとも春日、龍神、安宅……、「いや、私の得意とするのは、かの鈴木三郎が紀州の和歌の浦から、奥州の衣川迄、な、たび使ひをするといふ面白い能だ、亭へエ、」
 「それをやることにしやう、亭「しかしそんなものはまだ聞いたこともありません、」
 「ウム、なるほど、これはまだ誰れもしるまいぢやアこうしやう、唱ひは私が能をしながらうたふこと、して、太鼓や小鼓はた、その間にうつつて貰へばよい、佐「へエさやでございませうか、」
 「ついでには腹のすく能だから、舞臺の隅のほうへ握り飯とにしめを持つてきて貰ひたいナ、佐「へエ、かしこまりました」
 「亭主はわからぬながらに、そのことを能舞臺にある人々に告げ、さつそく握り飯とにしめをこしらへて、それを重に入れ舞臺へ持つてきておく。

此方は大日坊仙橋、手を打つて喜んでゐる、それに引替へ新左衛門はおほきに

心配をいたし、蜷エ、禪師、
 「なんぢや、新「あなたは能をやられるさうでござりますが、できますかな、」
 「いや新左衛門、私はまだ習つたことはないがやれんことはなからう、大丈夫だ、心配をするな、新「へエ左様でござりますかしかし能は大變むつかしいもので……、」
 「イヤ、構はんく、マアお前も見物してをれ」と御當人は平氣なもの、そう斯うする内に、いよくその時刻にあひなりますると、禪師においては舞臺の方へ出て行かれる。

新左衛門も心配になつてきたから、下へ降てこなたの間からヂツと見物をしてゐると、一休はこなたの間で衣の袖を高くか、び、尻端折りをして竹の杖を肩にかつき、戸家口からガツと舞臺に立ちいで、ソロ／＼摺り足をいたしながら
 「これは鈴木三郎重家が、奥州衣川までの使者にて候、路遠ければまづは急いてまゐらう」と聲高らかにおほせられると、ハツとその杖を擔いで小走りに

なり、「エツサツサ、エツサツサくくく」と舞台の上で駈出し、機を織るやうに向かふへ行つたり、こちらへきたり、ドンくくく駈まわりながら、舞台の隅へくるとかの重箱から握り飯にしめをムシヤくくつて、また、「エツサツサ、エツサツサくくく」とドンくくく驅けだし、また舞台の隅へ休んで握り飯を食ひ、にしめを頬張つて、また舞台を駆け出す。

一つことをいくきもく線かへすだけだから、太鼓、小鼓、地唄ひ、笛方などは開いた口が塞がらず、た、ポーツとして眺めてゐるこなたの見物もおなじく愕いた、
「なんだつまらない、オヤくくくいぐきでもおなじことばかりだ、せつかく京都の御能師だてわから、三里もあるのに見物にきて、こんなことだけぢやつまらない、しかしどうも退屈になつてきた、アーアー、
▽「どうも俺ア眠くなつて来たぞ、アーアー……」とみなく大あくびを仕出した、ところが禪師は

これにチラリと眼が着くと、「誰だ、今あくびをしたものは、これはナ、お前方にはわかるまいが、紀州から奥州までな、たび使者を勤める、その里程がどのくらひあると思ふ、どうしても一度に十五日はかゝる、その間は毎日く、そうしてそのま、衣川へまゐつて使者のやうすを物語る、まづそれまでは大人しく見物してをれ、モウこれへまゐつたからは、一人も歸すことはならんによつて、そう想へ、エツサツサ、エツサツサくくく」
「こまたもや舞臺を駆けはじめた。
イヤこれを聞いて見物人は膽を潰した、
「これは大變だ、十五日もおなじことばかりを見せられては、病氣になつてしまふ、それよりも喰物がなから死んでしまふぞ」
「ワイく騒ぎ出す、こなたに見てゐる大日坊はこれを聞いて愕いた、こりやこのま、ではすまないと思つたから、こなたの座敷で隙見をしてゐる新左衛門に向ひ、
大「ア、蜷川様、新「なんだ……、大「まことに相濟まぬこ

とをいたしました、あなたから禪師によろしくお詫を申しあげてください、新
イヤ、別に詫をすることはないぞ、あの通り禪師は能を見せて居られるから」と
云ふのは、流石は新左衛門、はやくも禪師のおこころを察して、この大日坊をお
きろかして遣るよ云ふおほしめしを知つたから、かう云つたのでござります。

大日坊はいよく弱り入り、大「どうか、そう皮肉におつしやらないで、お詫
を申しあげて下されませ、そうして私はこのでお暇を戴きたうござります、

新「ア、さうか、用があつて行くと言ふのならしかたがないが、元はみなお前か
ら起つたことだ、しかし一休さまはやりかけたことゆゑ、飽くまでおやんなさる
ところでお前がさういふのなら、しかたがない、ウンと……ウンさうだナ、然
らば斯うしやう、まだ十日や十五日はきつとあの御能をお続けになるから、お前
から三人十五日分の宿錢を置いて行け、そうすれば許してやる、大「へエー……

新「嫌か、嫌ならばしかたがない十五日でも一月でも、お前はこゝに泊つて見物
して居るがよい、大「へエ」と言つたがこれがいつまで續くか分らない。

まごころするど路用の金はスツカリ置いて行かねばならんと思ひましたので、
大「へエ、蟻川さん、それでは、こゝに持ち合せが五兩あります、これでどうか御
勘辨くださいまするやう」としかたがないから、大日坊五兩の金をだして新左衛
門に渡し、そのまゝ、狐鼠くんと裏口から何處ともなく逃げさつた、こなたは一休
相變らずエツサくと驅けまわつて居られる、見物人のワイく言ふくらひは馬
の耳に風だ、新左衛門は大日坊から五兩の金をうけてつてさつそく舞臺へ出てま
り、新「ね、禪師く、ちよつとさうかお待ち下さい、」
「ウンなんだ、早く
言へ、途が遠いから、急ぐく、」
新「御戯談おつしやつちやいけません、しかし
只今あの大日坊がかやうく申して出立いたしました、もうおやめになつても

宜しうござりませう、
 「ア、そうか、シテ宿錢はいくらとつた、
 新「へい、五兩置いて行きました、
 「それは少い十五兩もとつて遣ればよかつたに、然し彼れが居なければ、モウやめだ、
 亭主を呼んでくれ」とそこで新左衛門は亭主を連れてくる、
 「オ、亭主、私はまだ能を續けるつもりであつたが、あの言ひ出した大日坊が居ないからモ一これはやめにする、一同の者は勝手に引きとつて宜い、それとも強て見たくば十五日の間そこに控へてをれ、
 亭「へい……アノみなさま、今お聞きの通りの次第でござりますゆゑ、お望みの方はお留まりになつてもよろしいが、しかし御用事のあるおかたは引きとつてもよろしうござります」と大聲で見物人に言ひ觸れますると、一同はホツと息を繼ぎ、嬉しよろこんでドヤ／＼引きとつて行く。

佐七はなほも雇ひ込んだ太鼓、小鼓、そのほか地唄ひ、笛方などにも厚く斷

りを言つてかへしてしまひ、さて新左衛門に向つて、
 佐「ね、一寸伺ひますが、このお方は、まことの御能師でござりませうか」と、眞面目腐つて問ひかけた、
 新左衛門は可笑しくつてたまらん、
 新「ハ……亭主、このお方は御能師でもなんでもない、
 佐「へい、
 新「實は當時京都名僧の三幅對の一人、
 紫野大徳寺一休大禪師だ、
 佐「へい」と亭主はおどろいてしまつた、
 佐「へい、さような尊きお方もしらず、如何に欺かれたとは言ひながら、飛んだ失禮を申しあげて、何んともあひすみません、さうか平におゆるしをねがひあげます」と平蜘蛛のやうになつてお詫をする。

一休はニツコリお笑ひになつて、
 「さうぢや、亭主、モ一一度能を見せてやらうか、
 佐「へい、さうも恐れ入ります、
 「しかし亭主、私はあの能のたあに五兩の金を儲けた、その方は裏に棧敷をこしらへ、また座敷に大業なことをして

随分金が入つたことだらうから、その金はお前に茶代として遣はす、何かの足しにでもするがよからう」とかの五兩の金を亭主に與へる、そこで佐七も大きに喜び、さながら生如來のごとくに敬ひ尊んで、改めて座敷も替へ、いと丁重に饗應をしたのでござります。

四六 空一杯の阿彌陀笠

そこでその翌朝一休は、新左衛門を伴に連れ、佐七に暇をつけて、この草津を御出立になり、ブラリ〜と今しも土山の松並木へかゝつてくると、行手の方から、「わ、下に居ろ……下に居ろ……」と下座觸れをして、ドン〜此方を差して出てくるは、かねて紋所なきにて見覺へのあるその頃京都にあつて、西三十何ヶ國の管領赤松播磨守、家來二百人ばかりを伴に連れて、これへ通り

かゝつた、新左衛門はこれを見ると、密かに一休の袖を控へ、新禪師悪いところへ通りかゝりました、向かふから赤松が行列を揃へてやつてまゐりましたが、目に留まると面倒でござりますから、私はこの邊へ隠れて居りませう、「うむさうか、そりやお前の勝手にするが宜い、私はこゝに居て行列の通り過ぎるまで待つてをらう、新ハイ、それではちよつと御免を蒙ります」と蜷川新左衛門はそのまゝ向かふの松の根方へ隠れて居る、禪師は往來のまんなかに立つて、ヂツと平氣にかまへて居る。

スルト早くも禪師の前までです、んで來た行列の先き觸れは、武「コレ〜下に居れ〜、坊主下に居らんか」と聲をかけても禪師は平氣な顔をなされて、「イヤ苦しうない、武「なに……」」「苦しくないよ、武「そんなでもない奴だ、おまへの方は苦しうなからうが、こつちが苦しい、下に居ろ〜、コラ下に居ない

か」と、聲をかけても平氣な顔で、ヌツとツツ立つたま、でございますから、一人の武士は片ねへ振り向き、武「御同役、よほぎづうくしい坊主で、なかく下に居らん、きうしたものだらう、同「ウムそうさ、しかし坊主だから始末に行けない、サア……それでは一應殿様に申しあげて見やう」とくだんの武士はバラくツと赤松播磨守の前にきたり、武「エ、殿さまへまをしあげます、磨「ウムなんぢや、武「た、今かやうくしかくで下に居ツく」と聲をかけても、なか／＼下座をいたしません、いか、取はからひませう」ともうしあけると、磨「ウーウ、それは不都合な奴である、しかし出家は世外者ゆへすておくがよからう……、ア、あしこにゐるのがさうだな、武「ハツ御意のとほり、磨「見うける處笠がないようだ、永の道中さぞ難義なことであらうから、笠一介をつかはせ、武「ハ、ツ」と家來は自分の着てゐた笠をとつてまたもやこなたへ引かへ

してまゐり、ア、御出家、一「ウム何だ、お殿さまに申しあげたところろが、長の道中笠がなくてはお困りであらうから、笠をつかはせといふ御意、サアこれを其方にやるから、ありがたうお受けなさい、一「イヤ、その志は千萬辱ないが、私は笠を冠つてゐるから、二重にはかぶれない、一「へエー、どこに冠つておゐるでなされる、一「こゝにチャンと冠つてゐる、一「へエー、手前等が見たところでは、きうも冠つてゐられないやうに見へますが……、一「ウム、おまへたちは眼が悪いからわからんのだ、大きな笠を冠つてゐる、世界一枚の阿彌陀笠といふものだ、別に笠はいらんから播磨にそういへ、一「へエー、播磨……、怪しからん奴だな、一「何でもよい、まアそういつて見い」そこで再び先供の武士はこのことを播磨守に申しあげると、磨「ウム世界一枚の阿彌陀笠を冠つてゐる……なるほぎ、なかく面白こと

をいふ奴だ、捨て置けく……行列行けエ」とそのまゝ、ズーツとお通りになつてそれから土山の御本陣へお泊りになつた、跡見送つて一休、「新左衛門く、モウ行つてしまつた、出ておいで、新へエ、さやうでございませうか、いつもながら貴方のお言葉には、實にヒヤく致します、」「ハ、ハ、ハ、ア私についてこいよ、新へね、きつちへいらつしやいますので、」「今夜は何でも播磨の跡を追つて本陣へまゐり、赤松に馳走にならう、新「それはおよしになつたがようございませう、」「イヤかまわんくマア私にまかして跡へついておいで……」
 一休は新左衛門を連れて、スタく跡を追ふて出て来たのは、これぞ土山の本陣岩井平兵衛といふ家だ。

やがて玄關へ掛かつてくると、一「頼むく、たのみます」と訪れませうと、何しろ今日は赤松播磨守殿のお泊りと云ふので、家は非常に混雑をして居りま

するが、やがて亭主はそれへ出てまゐり、見るとまへに立つたのが乞食のやうな坊主でございますから、頭から馬鹿にしてかゝつた、亭「エ、こ、は本陣で、おまへさん方の泊るところではない、モツと下へ行くぞ、木賃宿が澤山ならんでゐるから、そこへ泊んなさい、」「いやく、決して心配にはおよばん、亭へ別に心配は致しません、今日は赤松さまのお泊りで見る通りの混雑だから、とても泊るわけにはゆかんよ、」「イヤその赤松に會へばわかる、同宿をするものだから」といふその言葉がきうやら本當らしく見へるので、亭主も妙な奴だと思ひながら、亭「イヤこれは狂人にちがひない、本氣とは見へぬが、なにしろマアひかへて居さつしやい」と此のことを赤松の家來に傳へる。

家來はこれを主君に申しあげるに、磨「ア、さうか、それでは先刻の坊主に違ひない、では金吾、其方行つてかやう申せ、同宿を致すのはそれでよいが、しか

し笠を冠つたまゝ、座敷へはいられてはまことに困るから、笠を取つて上んなさい
と、かやう申せ、金「ハ、ツ」近習の阪井金吾と云ふものは、播磨守の仰せ
を聞いて、さつそく玄關に出てまゐり、たゞおんでゐる一休に向かひ、金「イ
ヤこれは先刻の御出家か、望みによつて同宿を致してもよいが、笠を冠つてゐ
ては這入られまい、笠をどつて来て這いらつしやい」と云ふと。

一休はニコ／＼笑ひながら、「あゝさうか、赤松なか／＼面白いことを云ふ
な、ウム、それではこの阿彌陀笠はここへ掛けてよろしいか、笠を掛けるところ
を教へてくれ、金「へね……それはさうも……」
「さうぢやナ、金「しばらく
さうかお待ち下さい」とまた奥座敷へ這いつてきて、このことをお殿様に申しあ
げると、磨「なに笠を掛けるどころ……なるほぎ、これは困つた、いま／＼し
いことを云ふ奴だな、仕かたがない、これへ通せ、金「ハツ……、ね、御出家

さうかこちらへお通んなさい、
「ウムさうか、よし／＼……サア新左衛門、上
がらう」

今まで門際に控へて居りましたる新左衛門もゾロ／＼これへ出てまゐり、新
ハツ、お供致しませう」とこれから二人は足を洗ひ、案内に連れられて一間へ通
り、しばらく休息いたして居りますと、一休は廁へ行きたくなつたから、廊下
傳ひに廁へまゐり、用を足してこちらへ戻つてくるその折柄、ヒヨイと右手を御
覽になると湯殿があつて、その中に据風呂がある、金時繪全部漆塗の立派なも
のでございませうが、これはかねて赤松播磨守が道中用に携へたもので、てうど
よく湧いてゐる様だから、一休何かひそかにうなづきながら、手ばやく衣類を脱
ぎ捨て、サツ／＼風呂あびて蓋を元の通りに直し、なに食はぬ顔してよい心もち
で坐敷へ歸つてくると、スル／＼一人の武士が、
◎「エ、御出家、主人がお目に掛

からうとおつしやるから、早々こなたへ通らつしやい」といつてきた。「ア、さうか、案内をしてくれ、サア新左衛門、お前も行かうぢやないか」と一休は新左衛門を連れてお通りになる。

すると件の武士は、かねて有名なる京都町奉行蜷川新左衛門でございますから、心のうちに大いに驚いてゐる。その内に一休は坐敷に通つて見ると、播磨守は正面床の間に泰然として控へてゐるから、つか／＼とその坐敷へはいつてまゐり、「イヤ、これは赤松播磨守のか、始めてお目にかゝる、私は大徳寺の一休ぢや」ハツと驚いた播磨守、見るとうしろには新左衛門がついてゐるからその儘立ち上つて一休を上座へ直しながら、播ハツ、これは始めてお目通をいたします、かねて御高名は承はつて居りましたが、貴僧が一休大禪師さまでいらつしやいますか、なにぞ失禮の段は平に御容赦を願ひあけます、サアどう

ぞこちらへ……」と無理に和尚を上座へ据へ、播「これはく新左衛門守の、貴公がついて居られながら、なんで斯やうなことを致される、和尚なら和尚となぜはやく云つて下さらん」新左衛門はきまりが悪いから、和尚のうしろにさがつて顔をそむけてしまつた。

播磨守は和尚を上座に直し、自分は下座に下つたから、家來は驚いて庭へ飛び降りてしまつた、このとき和尚は播磨守に向かひ、「ときに赤松守の、其許が先刻お通りになつたときに、百姓町人が大分ブツ／＼つぶやいて居たが、どうもあの下にくと云ふのはよろしくないナ、先き供のものから下にくといはれた日には用の間を欠いでしまはなければならぬ、下々のものはまことに難義を致すから、以來宿入りの節は乗物のとほろとまだけ下にくでよからう、少しは下々のものもいたはつてやらねばいかんがナ、播ハツ、まことに恐れ入りまし

た、實は駕籠の中で前後不覺に眠り居りましたゆゑ少しも心づきません、以後はきつと改めます」とまつかな顔をして流る、汗をぬぐひながら、やうやくお答へになつた、
 「ハ、ア、駕籠の中で前後も知らずに寝て居つた……それはどうも困つたものだナ、京都に居つて西三十三ヶ國の政治はちと覺束ないぞ、さうぢや赤松ぎの、播「ハツ、まことにおそれ入りました、一、それから赤松ぎの、宿屋へつけば、風呂と云ふものは大抵な家にある、それを其許はいくら出来ることだからと云つて道中据風呂を持つて歩くといふは眞に不都合だ、以後ちと嗜まつしやい、播「これははや、まことに何で……おそれ入りました、さうく取こはす様にいたします……コレく家來ども和尚が御覽になる前であの据風呂をこはじてしまへ、家「ハツ」と答へてさつそくかの結構な据風呂を滅茶くこはしてしまつた。

和尚はそれでよからうけれど、播磨守はまだ湯にはいらぬ、これから湯に入つてつかれを休めやうとする前に、こはしてしまつたから汗を流すこともできない、そこでさつそく結構な料理を取り寄せ、和尚と新左衛門に御馳走をする、和尚は遠慮もなくそれをめし上がつて、
 「イヤさうも播磨ぎの、其許に出會つてこんな目出度いことはない、これが本當の目出度くの赤松さまよ……」と木遣り節を歌ひ出した。

播磨守も閉口してしまつた、この相手をして居ては何日か、るかかわからないと思つたから、その翌朝まだ暗いうちに起き出で、立波彈正といふ家來をただ一人残して置いただけで、供人を揃へてそのまゝ、ひそかにこゝを立つてしまつた、そのうち段々夜が明け放れると、彈正はさつそく和尚の部屋へ這入つてまゐり、
 彈「さて和尚さま、エ、主人義は急に要用出來いたし、手前を當家へとめ置きま

して和尚おせうによろしく申しあげくれよと申し置き、今朝こんてう未明みめいに出立しゅつたついたしました
 が悪あしからず思召おほしめ下さいまするやう、しかしあなた様さまには何なにぞ御ゆつくりと御
 滞在たいざいを願ねがひます、一「ア、さうか、赤松あかまつどのも閉口へいこうして歸かへられたのであるナ、ハ
 ヲ、ハ、イヤ私もこゝにいつまでも滞在たいざいして居をられないゆゑ、今日けふは出立しゅつたついた
 すであらう、しかし私わたし共どもは宿賃やきちんがないから、そのつもりで……茶代ちやだいも澤山たくさんに置い
 て行いつてくれ 彈たま ハイ、それは承知せうちいたしてをります」と宿賃やきちんから茶代ちやだいまで、み
 なこの立波たては彈正だんせうに拂はらはして置き和尚おせうはまたもや新左衛門しんざゑもんを連れこゝを出立しゅつたついた
 されたのでございしますが、サアこれよりいよく伊勢いせ國くに鈴鹿すずか郡ぐん關せきの城しろにのり
 こみ、名代なだいの關せきの地藏ぢざう献立けんりつ開眼かいがんといふお話はなしは次の一席せきに申し述べます。

四七

梅檀せんたんの地藏ぢざう

天照あまてらす大神おほかみを祀まつられたる伊勢いせの國くには、五鈴すずの川がはも水清みづきよく、流れ盡なきせぬその川
 水みづは、今いまに昔むかしを語りつゝ、神かみの光ひかりりともろとも、いや榮さかにさかたて居ゐるは、
 まことに御代みよ長久ちゆうきうのしるしでございします、さても一休いっけうにおいては、土山つちやまの本陣ほんじんを
 出立しゅつたつして東海道とうかいどうを下くだり、早くも關せきの城しろへ着ちやくいたされた、尤もつともこれは今いまの關せきの城しろ
 ではない、頃は人皇にんのう四十五代だい聖武せいむ天皇てんのうの御宇ぎよ、正法せいほう七年ねん九月くわつ十三日にち、遠州灘えんしゅうなだ七
 十五里りの大海嘯おほつせみによつて、諸所しよしよ方々ほうほう非常ひじょうの難義なんぎをいたしました、そこで朝廷てうていより
 御下命みかめいがあつて、諸所しよしよへ關せきと云ふものを設まつけた、一いの關せきが桑名くはな、二にの關せきが四日市かいち
 三さんの關せきが石いしの薬師やくし、四よの關せきが庄野せうの、五ごの關せきが龜山かめやま、六ろくの關せきが關せき、七しちの關せきが相あひの宿
 八はちの關せきが鈴鹿山すずかやま、この鈴鹿山すずかやまの頂上てうじやうに關せきの城しろがあつて、城しろの名なは笠置かさきの城しろといひ
 これは出城でしよで、本城ほんじやうは伊勢いせの松阪まつさかにあつてのちにこの松阪まつさかの城しろを龜山かめやまへ引ひいたの
 でございます。

されば和尚におかれては、新左衛門を供に連れ、この笠置の城へのりこんで來られたのでございます、しかるにこの笠置の城主北畠伊勢守安次といふ人は、かねて蜷川新左衛門とはいと懇意にして居られたところから、さつそく城内へこのことを申し入れる、伊勢守は大いによろこんで、さつそく城内本丸へ二人を案内し、殿は和尚にお目通を致し、丁寧にお禮を申し上げる、お供をしてまゐつた新左衛門は、知己の間柄でござりますから、萬事に都合がよく、さつそく山海の珍味をとり揃へて饗應いたし。

ついでには昨年悴鶴丸が病死をなし、まことに不びんにぞんじますゆゑ、なにぞ後世の菩提を弔ひまするため一寺建立を致し、入佛供養をしたき心得につきさうかよろしくお差圖を願ひまするに、殿様夫婦は一体にたのみこんだ、するに
 一休は、「ア、イヤ、それはまことによい考へではあるが、しかし當時日本國

中に寺の數はじつに九十五萬九千四十四ヶ寺もあつて、ちと多すぎるくらゐである、お前さんの家にも今日までの菩提所があらうから、その菩提所でよろしからう、一體當家の菩提所はごちらだナ、伊「ハイ、さやうでございます、私の家の菩提所と申しまするは、伊勢街道椋本の宿寶藏院とまをします、當住職に大仙和尚と云ふのが居りますが、さうか鶴丸菩提のため、天下の名僧をもつて法事を營みつかはしたく、それゆゑわさく和尚を御招待致しましたしだい、模様によつては改宗いたしても差支はござりません、
 一「イヤ、それはいかんことだ、宗旨はやはり先祖から守つて來たのがよい、しかし私はその寶藏院と云ふのをたのみたいのだが、こゝから大分あるかナ」

伊「イエ、途は僅が一里ばかりでござります、
 一「ウムさうか、それでは私は明日それを拜見にゆかう、
 伊「ハイ、それでは供揃ひをまをし付けませうか、
 一「

イヤ／＼、さう大業にしてみらふと困る、私は新左衛門を連れて、そつと行つて来ることにしやう」とその日はそのまゝ、旅のつかれを休め、その翌朝になつて、新左衛門を引連れて、ただ二人で家來一名を案内者と致し、この椋本宿寶藏院へ出て来て見るに、むかしはさうも立派な大寺院であつたらしく見へるが、只今では本堂も倒れてなくなつたのか、その邊一體の荒れ野とかはり、只愛染明王と繪馬堂とがのこつて、灰に昔のおもかけを忍ぶくらゐのもの、イヤはやさうも寺やら辻堂やらわからないくらゐの大破をしてゐる。

そこで一休は心の中に、「イヤ／＼大分こはれてゐるナ、檀家に立派な北畠と云ふ大名もありながら、この體裁であるとして見ると、一體北畠は佛法を信仰しないものと見へる、ところが今度愛子鶴丸と云ふを亡なつたがため、きうに心が動いて信仰を始めたのに違ひない」となほもいろいろ考へながらも、さ

つそく又もや城内へかへつてまゐり、北畠に面會をして、「さて北畠どの、あの寶藏院といふのは本堂もなにもなくなつて居るが、あれは一体どうしたので……、伊「ハッ、あれは火事のために焼失致しました、」「ハ、アさやうか、してそれは何時ごろのことだナ、伊「さやうでござる、その昔田村將軍が當鈴鹿山へ押し出し、賊軍を破りました時に兵火のために焼かれました、そのまゝになつて居ります、」「ア、さうか、しかし北畠どの、抑もこの人間といふものは十一歳まで先づ勤めといふものはないとしてある、十一歳から君に仕へ忠義を盡すによつて、人遍に十一と書いて仕へると讀ましてあるのだが、佛法でいつてもそのとほりで、十一歳未満で死んだものは賽の河原と云ふとこへ行つて石を積んであそぶ、すると地獄の鬼が出て来て鐵の棒を振り廻して子供をいぢめる、そのときに地藏さまが出て来て鬼を追拂ふのだ」

伊「ハイ、」
 「そこで、死んだ鶴丸は七歳であるとするれば、その菩提のためなれば、寺には地藏尊を本尊としかがよからうと思ふのぢや、伊「ハ、ッ、御道理のお言葉、シテその地藏尊は木佛でございますか、また金佛、石佛にいたしますか
 一「ウム、いやそれは私が紙へ書いて進上しやう、伊「ハ、ッ、私は先年長崎表において唐土妙見山の山中にあつたる栴檀を交易いたして持つて居りまするが、それで彫みましてはいかがでございますう、一「ウム」といつて禪師はお考へなすつた。

愛子を失つたがために當人は目がくらんでゐるから、いくら意見をして、今用ひるまづかひはない、まことに當北畠は伊勢の大領主で、名代の金満家ゆゑ、こゝう云ふときにドン／＼金を遣はして遣れ、またこの頃都で佛師の名人は光慶と云ふものであるが、これはなか／＼金満家であるから、高いところへ土持ちをす

るやうなもの、腕はさうでも功德のため貧乏な奴にこの仕事をさせてやらう、てうぎ千本通一條下るところに佐々木金吾則村と云ふ日本一の下手な佛師がある、貧乏はなか／＼一とほりでなく、と／＼大徳寺さまへも出入りをして居る、この則村に一つ金儲けをさせてやらうと思召された。

四八 赤貧の佛師

そこで一休は殿にむかひ、一「ア、それはよからう、では千本通一條下るところに佐々木金吾則村と云ふ佛師の名人があるから、この者をよびよせてその地藏を造らせるがよからう、伊「ハイ、」
 一「そこで私が書面をした、めてやるゆゑ、それをもつて呼び寄せることにしよう、伊「ハイ何分さうぞよろしく願ひもうします、」
 一「しかし、その佐々木金吾と云ふものは、氣に入らなければ決して彫

らん、私が頼めばきつと来るだらう。ついてはその者は腕はよいが大變な貧乏人だから支度金の三百兩も持つて行つてやんなさい、伊「ハッ、委細長まりました一休さまがまことらしくおつしやるから殿様も煙にまかれてしまひ、さつそく野路猪惣次と云ふ者に三百兩の金をもたせ、一休の手紙を頂いて、わざく日本一の下手佛師を迎へに遣はしたのでございます。

そこで猪惣次は急ぎ都へのほつてまゐり、漸く尋ね當て來てみると、なるほぎなか／＼貧乏らしい、猪惣次は家へはいつて金吾に面會致し、これく／＼だと委細の話しをするに、金吾は意外の金儲けに大にうちよろこび、急ぎその三百兩の金をもつて支度をし、のへ、野路とうち連れ立つて笠置の城へ同道致しました、先づ則村は一休にお目通をして厚くお禮をもうしあけると一休は、一「さて金吾、いつも相變らず其方は貧乏だらうナ、金「ハッ、おそれ入ります、おほ

せのとほりで……、一「さうだらう、かね／＼話しも聞き手紙も見たであらうがお前に金儲けをさせて、以來樂にしてやるから、地藏の坐像を一体拵へて貰ひたい、お前に巧く拵へと云つてはちと無理なやうだが、ごんなのでも構はないから一つ作つて見てくれ、金「へエ、さやうで……、一「どうも妙な返事だが、できるだらうナ、金「それがそのなんで、所謂、そのかるがゆゑに……寧ろどうてい就中……、一「なに、金「それがその……、一「それでは出來ないと云ふのか、金「まづそんなもので……、一「そんなものではない、佛師として地藏の像くらゐが出來ると云ふのは不都合ぢやないか」

金「ではござりませうが、私にはできません、私は都にをりましても立像の釋迦ばかりを拵へて居りましたから、どうも六つか敷うござりますナ、一「それは困つた男だナ、ウーム、ではこうするがよい、新左衛門と私が手傳つてこし

らへることにしよう、なに形ちさへできればよい、人が見ると貴様の金儲けが出来ないから、誰も見ないやうにしてやらう」と一休はさつそく殿をよんで、「さて伊勢殿、いよく金吾則村が地藏菩薩をこしらへることになったが、ついでにはなるべく山の奥の清浄な地を選んで新に小屋をかけ、それへ私らもともにまゐつて、一刀三禮に及んで刻むからさう致してくれ、しかしその小屋へは私と新左衛門と則村とだけで、決して他の人をいれては相ならんぞ、伊「ハッ」

北畠小供のことで夢中になつてをりますから、物入などはトンと厭ひは致しません、「すこしもはやく致せ、伊「ハッ、委細承知を致しました、シテ一刀三禮ともうしますと、」ウム、それはこうだ、まづ則村が一刀入ると、私が經をよみながら禮をする、精進潔齋におよんでこしらへるのであるから、諸人出入とめぢや、伊「ハアアさやうで、なるほど御もつとも千萬、まことにありがたう

ぞんじます」そこで北畠伊勢守は、家來に云ひつけて、さつそく近邊の清浄の地をわらんで小屋を建てた事に、大名のすることでもござりますから二三日の間、にすつかり出来上がつてしまつた、そこで則村をはじめ一休、新左衛門の三人はそこへ引移つてコツク仕事を始める、もつとも食事はみな北畠の方から運んで行く、するに十日ばかりの間にやうやく地藏菩薩一體が出来上がった、

「イヤ、さやうこれで地藏が出来あがつた、上等く、新左衛門、地藏と見えへるか、新「さやうでござりますナ、まづ地藏と見えへません、」なに地藏と見えへない……、それではなんとも見えへる、新「へいまづ狸の化物でございませうか、」「オヤ、狸の化物とはひどいことを云ふ奴だ……しかしママよ、これで出来たとして置け……、そこで金吾、お前は北畠へこれを持つて行つて遠慮なく作料をえれ、そうしてさきに都へ歸つてをれ」

金「へい、ありがたうぞんじます、一「作料は充分に貰へよ、金「ハイ」そこで改めて金吾則村からこの趣きを役人に届ける、役人は、役「イヤどうも大きに御苦勞であつた、シテ作料はどのくらゐつかはさうかな」と云はれて金吾は、かねて一休のお言葉もあるから、一つ法螺を吹いてやれと思ひましたゆゑ、金「エ、今度の地藏尊は禪師のお言葉もあり、一生懸命になつて作つたのでございますゆゑどうか金子千兩だけ頂戴致したうぞんじます、役「エツ、千兩ツ……」役人もこれはちと高いナと思つたが、一休が日本一の佛師だ云はれたことゆゑ、これは千兩ぐらゐの値うちはあるだらうと、言ひ値の通り千兩の金を則村にくれたのでござります、則村は喜んだの喜ばないぢやない、雀躍りしてその千兩の金を押し頂き再び彼の小屋へ下つてきた、一「ア、金吾か、どうした、金「へい、お蔭をもつて大金を貰つて來ました、一「ウムそうか、それは結構だ

しかし對手が對手だから、大金と云ふと金の十萬兩も貰つたか、金「へッ、御戯談を……金子千兩を頂いてまゐりました、一「エーッ、たつた千兩か、モウちつと掛けてやればよいに、金「イヤどう致しまして、千兩と云ふ金は私はまだ生れて持つたことがござりません、どうもありがたうぞんじます」一「ウム、それでもよい仕方がない、しかしそれでは貴様その金を持つて、すぐ都へ歸るがよからう、私はまだ色々用事もあるから、金「さやうでござりますか、それではお先きへ歸らして頂きます」とこれから佐々木金吾則村は、千兩の金を虎の子のやうに大切に北畠、一休、新左衛門その他役人方へもそれぐ暇乞を致し、つひに都へ歸つてその後は可なり暮して居りましたそうござりますが、これも一休陰徳の一つでござります、さてこなたは一休出來上がつた五尺三寸の地藏尊を持つて殿の處へきてこれを見せる、殿も大にうち喜び

日本一の佛師が一生懸命で拵へたと云ふから、定めしよくできたであらうと、じつと眺めると、こはいかに出来どこなひの雪だるまのやうで、おまけに兩眼がないから、これはとばかり驚ろきながら、伊「エ、禪師にうかがひます、」「ウム、なんだナ、伊「この地藏には眼がないやうで……、」「エツ」

と一休も驚ろきながら、前へ廻つてその地藏尊を御覽になると、なるほど兩眼がない、心の中に一休、オヤこりア大變だ、金吾の奴め金のことばかり思つて居たので忘れたのに違ひない、と思へしたが流石は一休、ニツコリ笑つて、

「イヤ、伊勢ぎの、これはナ、眼と云ふものはまことに六ツかしいもので、一番大切なところだから、私に入れさせるつもりでわざといれずにまゐつたのだ、ドレく私が入れてやらう」とかねて彫刻用を買求めた小刀を持ち來り、顔の兩側へチヨイ〜兩眼らしいものを刻みこんだ、殿はこれをながめて大いによろこび

うやくしくその地藏尊を一間へ直し、伊「エ、禪師、つきましては來年が鶴丸の三回忌に相當いたします、そのときにあの地藏尊を寺へ納めまするゆゑ、それまでどうか御逗留くだされたい」

これを聞いた新左衛門、來年までこんなところにはかりに居られるものかと思ひましたから、チヨイと一休の袖を引いて、なにか目でしらせま、するど一休は早くもそれと觀察しになり、

「イヤ私はこれから、すこしまはるところがあるゆゑそう長らく逗留するといふわけには行かない、三回忌のときはまたあらためて當所へ來ることにしやう」とこゝで一休はまたもや新左衛門を連れ、一旦こゝを出立いたされたのでございますが、その翌年一休は再び當所へお越しになり北畠伊勢の手で一寺を建立いたし右の地藏尊を納めたのが、今においても残つてゐる關の地藏でございます、サアこれよりいよく一休が身延山へお乗りこみ

になつて詫證文を入れられたといふ、いと面白きお話しは例によつて次席にゆづり一寸一服御免を蒙ります。

四九 念佛入の詫證文

さても一休におかれては、あいかはらず新左衛門を連れ、これからまづ第一に伊勢の外宮内宮などへ參詣をいたし、それより諸所を御見物になつて、桑名から宮の驛へ渡り、島崎、池鯉鮒、赤阪とだんく東へ下つて興津、こゝよりまたも道をかへて甲州の身延山へ來たのでございます、身延山には御存じの通り大きな山門があつて、その前に立札が立て、ある、一休はその立札を讀んで御覽にな

ると、念佛のともがらはいるべからず

と書いてある、そこで何と思はれたかズイと山門の前に立つたまゝ、大きな聲で「南無阿彌陀佛くく……」と念佛を稱へられた、するといましも山門の中を掃除して居た山番はこの聲を聞きつけて、不埒な奴だと思つたから、バラくツと表へ飛びで、まゐり、山「コラく、きさまは一体なんだ、念佛のともがらいるべからずと書いてあるこの立札がわからんか」と怒鳴りつけた。

このとき一休はニコく笑ひながら、「ハ、ア、念佛を稱へて悪いか、山に悪いにもよいにも念佛をとなへることはできん、ア、さうか、それはおほきに悪かつた、さうか勘辨してくれ、山「ウム、勘辨しろと云ふなら許してやるが以後はならんぞ、貴様はこゝをさだと思ふ、坊主のくせに身延へ來て念佛をとなへるなんて途方もない奴だ、氣をつけろツ」と叱りつけて置いて山番はまたもや門内へはいつて行く、するとい休はこれを見送つて、再び大聲に、「南無

阿彌陀佛くく……」とやりはじめた、サア山番は怒るまいことか、まつかな
顔をしてそこへ飛びだしてまゐり。山「コリヤ、またやり出したナ、サア、もう
かんべんならん、さうするか見ろツ」といまになぐり掛けやうとする有様でござ
いますから、こなたに見てゐた新左衛門は、こゝによつたらこいつ一番ひきいめ
に會はしてやらうと身構へる。

このとき一休は、一「イヤ、私がわるい、あやまるから勘辨ししてくれ 山「い
や勘辨ならん、わざと大きな聲でさなりアがつて……、一「そうであらうがマア
詫書をだすから、それで勘辨してくれ、山「なに詫書を……ウムよし、それなら
勘辨してやる、サア書け、一「ちよつと待て、いま書いてやる」と、一休は懐紙
をとりだし矢立の筆をぬいて、なにかサラ／＼ツツこれにしたゝめ、一「サアさ
うかこれで許してくれ、山「よし／＼、しかし以後はきつと氣をつけろ」と山番

は門内へはいつて行く、禪師はニコ／＼笑ひながら、一「サア新左、もう山を下
らうぢやアないか、新「へい、しかし禪師、あなた詫状なんてお書きにならないで
もようございませう、一「イヤ、かまはん／＼、マア來い」と、そのまゝ、山を下
つて行かれた。

こなた山番は右の詫書をもつて、當時身延山の住職日貞上人のところにへやつて
まゐり、山「エ、もうしあけます 日「なんだ、山「ただいま、さこの坊主かは
しりませんが、山門の前でおほきな聲で念佛を稱へましたゆゑ、私がそれをとが
めました、ところがその坊主はさうか勘辨をしてくれ、詫書を書くからとかわやう
申しますので、私もその坊主から詫書をとつて許してやりました、さうか御覽く
ださいまし」と日貞に賞められやうと云ふ考へで、鼻高々と右の詫書を出した、
日貞はこれを手にとつて讀んでみる。

詮入申す一札の事

何程の、無法な事が有るとても、身延に参らば、助けたまふぞ、佛徳に對し有り難やく
謹白

宗 純

とかいてある、日貞はこれを読んで、なにかしきりに考へてゐられたが、何か氣のついたことがあると見へて、日「コレ權助、權「へエ、日「なんだつてきさまはこんなものをとつて來たのだ、權「なんと言つて、詮書で、日「馬鹿を言へこれは詮書でもなんでもない、この内に南無阿彌陀佛とかいてあるではないか、權「へエ、ここに……、日「サア、この詮狀の頭字を取つてみる、なにほどの頭字でなだ、無法なことでもだ、あるとでもであだ、身延へまゐらばでみだ、たすけたまふでただ、佛徳に對ししかぐの佛、それで南無阿彌陀佛、奇麗に揃つ

て居るではないか、これで見るとつまり南無阿彌陀佛がありがたいと言ふことだ
權「へエ、なるほどさうでございますね、日「なるほどではないぞ、そんなものが何の役に立つか……しかし名が宗純……宗純といへば、大徳寺の一休禪師にちがひないが、こんな御僧だつたナ、權「へエ、さういふ坊さんで、日「ウム、それは大變だ、禪師に相違ない、はやくお迎へ申してこい」と跡で權助を見にやつたが、はや禪師は山を下られたと見へて、姿が見へない、止むを得ずこのことをいふ、日貞も大いに残念かられたと云ふことだ、後にこの詮狀は身延山の寶藏へ納めて大切に秘藏せられたさうでございます。

五〇

法然と日蓮

ところがこなた一休は、山を下ると身延の町を歩きながら、おほきな聲で、「

南無阿彌陀佛くくく」と、ごなへてお出でになると、するところの界限はみな法華ばかりだから、宿屋は門並にあるがひととして泊てくれるところがない、新左衛門は困り入つて、宿屋をみると飛びこんでまゐり。新「二人づれだが、一晩どうか厄介になりたい」と頼むと、ごごもかしこも同じやうな口上だ、□「どうもお氣の毒さまで、手前共は座敷がみな塞がつて居ります」と、みな斷つてしまふから、新左衛門はいよく閉口してしまひ、新「どうも禪師困るぢやございませんか」

一「なにが、新「なにがつて、あなたが念佛をごなへて居られるので、ごごでも泊てくれません、郷に入つては郷に従へで、題目でもごなへてくださればよい」
 一「ウム、そのごごか、イヤそれならかまはん、泊てくれなければ今晚野宿をするだけだ、新「野宿を……これだけは禪師どうか御免をかうむりたいもので、

一「ナニ構はない、南無阿彌陀佛くく、新「どうも困つてしまひますな」とごごすく言ひながら町外れへ来るご、かたへの武藏屋と言ふ一軒の宿屋から、亭主が戸口へ飛びだしてまゐり、亭「モシく御出家、お見受けもうせば宿に外れて御難義のやうですが、私ごもへお泊もうしますからこちらへお出でなさい」言はれて一休、新左衛門の兩人は、二足三足うしろへ下つてまゐり、一「ア、そうか、それは辱ない、推量の通り宿をとりはづれて居るのだ、當町では念佛宗のもののごごでもごめないやうだが、貴様のごごでは私をごめてくれるか、しかし宗旨は何だ」

亭「へい、私は浄土でこの町のものが改宗しろくごごまをしますが、先祖代々親たちが信仰して来たものを、私の代でかへると言ふのはまことに心じかなひませんから、誰がなんといつたつて改宗はいたしません、それがために近所の奴が

私をのけものにして、口を利く奴もないくらゐ、癩にさはるが仕方がないと思つて居ります。決して御心配なくお泊りなさるやう、

「ア、そうか、それは感心だ、それでは一晩厄介にならう……」

そこで二人はこの宿にこまることになり足を洗つて上へ通つたから、新左衛門もやうやく安心をして、ホツと一息ついたのでございます。

ところがしばらくすると、この宿屋の亭主は、一体の部屋へはいつてまゐり、四方山の話をしてゐるうち、亭主しかし御出家、私はほかのことは決してこまりはいたしません、この身延の町に居ると、こればかりは毎日癩にさはるでございます、

「ウームなんだナ、

亭主「外ではございませぬが、二三年前から私し方に一疋の犬を飼ふて居ります、その犬が近所の犬と噛み合をするので、そうすると、きつと向ふの犬の飼主が出て来て、家の犬をなぐります、癩だから

こちらでも向かふの犬をなぐつてやらうとすると、向かふの犬の首ツ玉に法然どかいた札がつけてあつて、俺んところの犬は法然だ、うてるならうつて見ると、こゝういふ、なるほぎ此いつは佛さまに對して打てないから、家の犬は噛み倒されるのをだまつて見て居る、これがまことにざんねんでたまりませぬ、

「ウーム、

亭主「ア、それはなるほぎ面白い、さアそういふことにいたしましたせう、どうかすみませんがその犬の札をおかきなすつて……、

「ウムよし、板切れをもつて來い」

やがて亭主は禪師に木札に日蓮といふ名をかいてもらい、それを犬の首へしぱりつけた、禪師はその夜この武藏屋へお泊りになつたが、その翌朝になる

と、表が大層騒々しいから何だらうと、窓から首を出して御覽になると、なるほき亭主の云つたまほり、相かはらす飼犬の喧嘩で彌次馬連がワイ／＼いつて騒いで居る、その中に亭主は大聲で。

亭「サア、うてるならうつて見ろ、俺の家の犬は、日蓮と名をかへたのだ、憚りながらきさまたちには手がつけられぬエ、さうだッ」と威張り返つて居る、これをながめて一休は、ツカ／＼と表へ出てきられ、大勢の彌次馬を制しながら、

「コレ／＼、皆しづかにしろ／＼、動もすると、さ／＼いなことに角目立つて喧嘩をするが、四海はみな兄弟で、仲よくむつまじく今日を暮さなければならぬのだ、南無妙法蓮華經の題目宗と、南無阿彌陀佛の念佛宗で、その宗旨のちがふところから、朝晩顔を見合つても知らんふりをして居るとは、おほきに心得ちがいだ、さう言ふことが度かさなると、しまひには公事が起るやうになる、さうな

る。この兩方の住持がさのくらゐ迷惑をするか知れん南無阿彌陀佛と南無妙法蓮華經の南無を取つてみい、四字と五字になる。

南無をよけ四字と五字とで九字になる

一字のことで住持めいわく

さうだ、わかつたか」と懇々とおさとしになると、近所の宿屋の主人たちも、

「なるほき、この御出家のおつしやることはもつともだ、これはさうも自分たちの心得ちがひ、以來は仲よく暮らさう」と一同はうちとけましたから、禪師も殊の外およろこびになり、その晩はこゝに御一泊いろ／＼の御説教をなされ、翌日こゝを出立いたして、京都への歸り道だん／＼と進ませ、越前の國福井の城下を少々離れましたる在所へおつきになりました、ところがこゝに吉祥山永平寺といふ寺がござります、その住職を禪教和尚といひ、曹洞宗の禪教和尚とま

をしましてはそのころ並びなき高名の聖僧、その以前をただしますると、門前花屋の子ださうでございませうが、生れながら顔のまんなかに一箇のほくろがあり、近所の人々も佛の相があると云つてゐられましたが、三歳のとき南無阿彌陀佛と書きまして、これが大いなる評判になり、それを先住の孝善和尚が聞かれて弟子といたし名を善教とつけて修行をさせますると、一を聞いて萬をさるといふくらゐ、ナカ／＼發達も人並すぐれてはやく、丁度八歳のとき孝善は裏のみはらしのよい所へおよびになりました。

孝「コレ／＼禪教、それ向かふにある帆掛船、あの帆が眼ざはりになつて沖がみへぬが、其方の力であの船の帆をかくすことができるかどうぢやな」と云はれて賢い禪教は、禪「ハイ、かしこまりました」とさつそく立ちあがつて、孝善のうしろへまはつて、バツと兩手で眼を押へ、禪「どうでございませう、スツカリか

くれたでございませう」このときには孝善も舌をまいて驚ろきました、斯ういふお方でございますから住職になつてからも、其の評判はますます／＼高く、そこで一休も一問答を試してみたいとやつてまゐりました、玄關に立つて案内を乞ひますると、流石は一休、普通の雲水の僧とは違ふことなく異なつてをりまするから、一人の番僧が出てまゐり。

□「ア、これは／＼御僧は何れよりお越しでございませう、一「私は諸國行脚の僧でござるが、お住寺は御在寺でござるか、□「ハイ、只今御他行中でございます、一「ハ、アさやうか、それは残ねん千萬……、しかし本日はお歸寺になりますかな、□「ハイ、さやうでございませう、四五日はお歸りにならないかと存じます、一「さやうか、それでは甚だもうしかねるが、どうか伽藍を拜見さして戴くわけにはまゐらぬか、□「ハイ／＼、どうかごらん下さいませ……、」とこれから

案内いたされて、本堂へ參詣種々寶物を拜見せられ、だんく〜と廊下を奥ふかくお出でになると、そのまんなかに一つの額がございます、その額の上のほうには、〜、〜三つ點がかいて、その横手へまた、〜、〜二つ點がしるしてあるだけで他には何にもかいてはございません。

禪師は足をどめてごらんになり、
「ハテナ、番僧殿こりやなんと云ふことぢや、
「さやう……どうもわかりませんが、しかし當山第一の寶物、三點二點の額でございます、
「フム……あれが分からぬともうされるか、
「へエ……、

「イヤなるほど、お前たちにはわかるまい、無理はない、だがお前たちの師匠禪教といふ仁は知つてゐるやうな、
「へエ、師の坊もまだわかりかねて居られるやうで……、
「フム……自分の持物を自分がわからぬでござうする、たゞへばこゝに箱がある、この箱はさうしてあけるものぢやと出してみても、開けること

を知らねば使用することも出来まい、よつて人には知らせずとも我れは知つて居らねばならぬ、しかるにこの三點二點の額がかけてあつて、その持主がわからぬときには皆が知らぬのも道理ぢや、
「イヤ、何とおつしやつても師の坊さへ御存じのないもの、學寮の僧たちにこの意味のわかるものはございません」

「ハ、ア、越前の永平寺は大きな寺ぢやが、聞くところが、無學な奴がたくさん居る所ぢやな、
「それでは御僧は御存じか、
「いかにも、
「それではさうぞお教へあそばして……、
「イヤ〜、こゝでは云はぬ、もし習いたくば禪教に來いと云ふて下され、
「して御坊の御住所は、
「ヨシ〜」と云ひながら、懷から半紙を取り出し、いくらかの金子をつゝ、み裏に少さく宗純と書いて、
「コレ〜番僧殿、これは些少なれ〜……さうか歸られたらよろしく、この坊主が來たと云ふてもらつたら直わかる、もう歸りませう」と暇をつけ、其ま

、にして禪師はお歸りになつた、新左衛門は禪師にうちむかひ、新「禪師、あの額はなんと云ふことでござります、」
「あれは番僧が言ふとほり、永平寺第一の寶物、あれはこう言ふのぢや、

風月も現世を棄てし躍りかな

さうぢやや、わかつたか、新「へエ……さうして、ございます、」
「フムわからぬか、もつともぢや、風といふ字のなかには、と云ふ點がある、また月と云ふ字の中には、の點がある、それで風月、それからほかには何にもない、現世を捨て、それが書いてあるのが躍つてゐるやうにみへるから、かやうにもうしたのぢや、新「ハ、ア、さやうでございますか、」と新左衛門も大いに感心いたしました。

五一 永平寺の禪教白痴を禪師の許へ送る

然るにこなた禪教は旅からお歸りになりました、禪「ア、今かへつた、留守中何も變つたことはなかつたか、」
「へエ……別に變つたこともござりませんでしたが、先達で旅僧がまゐりまして、彼の三點二點の額の拜見を望みましたから、みせて遣りました、ところがしかく斯々にもうして、尊師をはじめ一同を蛆虫問然に心得てをりましたのは、實に怪しからんことで……」
禪「フム……してその者の名は……、」
「かようなものを置いてまゐりました」と差し出す一封、手に取つてみると、裏に小さく宗純と書してござりますから、
禪「ウム……しまつた……、」
「それでは御知り合でござりますか」

禪「こりや貴様達は知らぬのか、」
「へエ……一向に……、」
禪「残念なことをいしたした……これはこの頃評判の高い、京都紫野大徳寺の一休禪師ぢや、」
「へエ……それでは彼の方が、一休様で……、」
禪「して、三點二點の額、あれは心得